

# 那珂 25

—那珂遺跡群第68次調査の概要—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第639集



2000

福岡市教育委員会

## 序

古くから大陸文化受容の門戸として栄えてきた福岡市内には、多くの史跡や文化財が分布しています。本市では、こうした文化財の保護・活用に努めているところですが、各種の開発事業によってやむをえず失われる遺跡については、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行っています。

本書は、博多区竹下五丁目地内に所在する那珂遺跡群内で、共同住宅建設に先だって発掘調査を実施いたしました那珂遺跡群第68次調査の報告書です。

本調査では、弥生時代から室町時代にかけての集落跡が検出され、多くの貴重な資料を得ることができました。とりわけ、飛鳥時代と考えられる大型の建物の発見は、この地域の歴史を考える上で、非常に重要な発見であります。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました住友石炭鉱業株式会社をはじめとする関係各位の方々に、感謝の意を表します。

平成12年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西 恵一郎

## 例　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が、平成11(1999)年2月12日から同年3月31日まで発掘調査を実施した、共同住宅建設に伴う那珂遺跡群第68次調査の概要の報告書である。
2. 遺構の呼称は記号化し、柵列をSA、掘立柱建物をSB、堅穴住居址をSC、溝状遺構をSD、井戸をSE、土坑をSK、柱穴をSP、不明遺構ないし特殊遺構をSXとしている。
3. 本書に用いる方位は磁北である。調査区の座標は任意のものであるが、いくつかの座標杭について、福岡市教育委員会設置の、那珂地区における測量基準杭から移動した国土座標の数値を記述している。また、調査区内のレベルも、上記の測量基準杭の標高から移動したものである。
4. 本書に用いる遺構図は、久住猛雄、坂元雄紀、坂本真一、山口耕平、今塙屋鏡行、佐藤信、西堂将夫が実測・作成した。遺物の実測は、平川敬治、井上加代子、丸山陽子、森本朝子、坂元、西堂、森本幹彦、木内智康、大島隆之、坂田邦彦、久住が行った。現場写真および遺物写真是久住が撮影した。製図は、成清直子、平井裕子、山根ひろみ、上角智希、井上蘭子、坂元、西堂、久住が行った。
5. 本書の編集は久住が行った。なお、色合子については森本朝子が記述し、その蛍光X線分析については二宮修治先生ほかのご協力と分析結果報告を頂いた。また、遺構土壤の自然科学分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その報告を得た。これら以外の原稿の執筆は久住が行った。
6. 本調査に関わる遺物・記録類(図面・写真)は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。
7. 表紙写真は拡張区検出大型建物SB07、裏表紙写真は古代井戸SE05である。

## 目　次

I. はじめに	1
II. 遺跡の立地と歴史的環境	1
III. 調査の記録	7
IV. 自然科学分析報告(二宮修治ほか/パリノ・サーヴェイ株式会社)	31
V. おわりに	35

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経緯

平成10（1998）年12月3日、住友石炭鉱業株式会社九州支店長阿部勝彌氏より、博多区那珂5丁目94番における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前審査願が福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。申請地は、那珂遺跡群として周知されている範囲内であり、周辺の調査成果からも弥生時代から中世までの遺構の存在が予想された。埋蔵文化財課では関係者と協議の上、平成10年12月17日に同地の試掘調査を行った。その結果、申請地は旧地表の削平を受けているものの、柱穴や土坑などの遺構が検出され、周囲と同様の遺構群の広がりが確認された。この試掘調査の結果をもとに、遺跡の取扱いについて関係者と協議を行った。その結果、共同住宅建設の敷地部分について、記録保存のための発掘調査を実施することになった。そして、住友石炭鉱業株式会社の受託調査として、1999年2月12日より発掘調査を開始した。発掘調査は、同年3月31日に終了した。

なお、整理作業は1999（平成11）年度に行い、報告書を作成した。

### 2. 調査の組織

調査は以下の組織で行った。調査にあたり、住友石炭鉱業株式会社および現場施工担当のコスモ建設株式会社中半田龍文氏には、条件整備等で多大なるご協力を頂き、調査を円滑に進行することができた。ここに記して感謝申し上げたい。

調査委託 住友石炭鉱業株式会社

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 町田英俊（調査年度）、西窓一郎（整理年度）

調査統括 埋蔵文化財課 課長 柳田純孝（調査年度）、山崎純男（整理年度）

埋蔵文化財課調査第2係長 山口謙治（調査年度）、力武卓治（整理年度）

調査庶務 文化財整備課 木原淳二（調査年度）、宮川英彦（整理年度）

調査担当 埋蔵文化財課調査第1係 久住猛雄

調査作業 奥田与志郎、木田ひろ子、柴田常人、尊田綱代、高木美千代、田中和祐、田中肇、田中弘子、徳永洋二郎、鳥居原良治、中山竹雄、平山栄一郎、坂元雄紀、西堂将大、坂本真一、今塩屋毅行、山口耕平、樋口裕子、野村蘭、古瀬直美、中山和子

整理作業 成清直子、平井裕子、甲斐田嘉子、富田輝子、樋口裕子

## II. 遺跡の立地と歴史的環境（Fig. 1）

那珂遺跡群は、福岡平野の中央の御笠川と那珂川に挟まれた洪積丘陵の北端に立地する。この丘陵は、花崗岩風化礫層を基盤として、阿蘇山の火砕流による八女粘土、鳥栖ローム層が上部に堆積・形成されている。北に接する比恵遺跡群と同じ立地であるが、両遺跡の間には若干低い地形の部分があるものの、遺構の分布や時期的な展開状況からは実質的に同一の遺跡群と考えられる（田崎博之1998「福岡地方における弥生時代の土地環境の利用と開発」『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会）。この範囲は、中世以降の開墾や近代以降の区画整理や都市化による地形の削平や変形が著しく、遺構の残存状況も必ずしも良好でない場合が多い。これらを考慮した比恵・那珂遺跡群の旧地形の標高は、5～11m前後である。近年では、比恵・那珂遺跡群を南北に貫く弥生時代終末から古墳時代前期の道路状遺構の存在が指摘されており（久住猛雄1999「弥生時代終末期「道路」の検出」『九

州考古学』第74号)、同一の集落遺跡であることはほぼ間違いない状況となりつつある。比恵・那珂遺跡群を一つの遺跡とした場合、その範囲は南北2.4km×東西0.5~0.8kmとなる。もちろん時期によって、遺構の展開範囲が異なっており、これをそのまま各時期の遺跡の規模とすることはできないが、弥生時代中期末頃、古墳時代前期初頭頃、飛鳥時代前半(6世紀末~7世紀前半)の3時期に遺構分布のピークがあると考えられ。これらの時期の遺跡範囲は100haを超えるとみられる。この規模は、畿内の都城を除けば、日本列島における弥生時代から飛鳥時代の集落遺跡では最大級の規模であり、これだけでも比恵・那珂遺跡群の重要性が理解されるところであろう。なお、弥生時代早期から弥生時代中期前半までの遺構・遺物は台地の縁辺部にあり、別々の複数の集落として存在したようで、弥生中期中頃に台地中央部に突然集住して広大な集落を形成するようになる。

福岡平野中央部は、中國の歴史書に見える「奴国」の中心地とされ、また『日本書紀』に見える「那津」の地域とされ、これを裏付けるように、弥生時代から古墳時代、飛鳥時代の多くの重要な遺跡が分布している。特に御笠川と那珂川に挟まれた、春日丘陵から比恵・那珂遺跡群の丘陵にいたるまでの部分は、特に弥生時代を主とする遺跡が濃密に分布する(春日市教育委員会編『奴国の首都須玖岡本遺跡』吉川弘文館)。春日丘陵には、前漢鏡を30枚以上出土した「王墓」で知られる須玖岡本遺跡の壇場を主とする墳墓群をはじめとして、その南側の丘陵部分には岡本遺跡、パンジャク遺跡、赤井手遺跡、竹ヶ本遺跡、平若遺跡、仁王手遺跡、伯玄社遺跡、ナライ遺跡、大南遺跡、大谷遺跡、高辻遺跡、西方遺跡といった、弥生時代中期中ごろから終末期までの集落・墳墓群、あるいは青銅器埋納遺構が分布し、環濠ないし大溝や、手工業生産では鍛冶工房や青銅器・ガラス製品の鋳型も検出されている。これらの各遺跡は、現在丘陵の嶺ごとの字名で呼称されているが、隣接する遺跡との境界は不明瞭な場合が多く、環濠の想定延長や遺構の展開過程(その消長や丘陵の造成事業)など



Fig. 1 周辺の遺跡分布図 (S=1/75,000)

から考えても、相互に有機的な関係を持った、事実上同一の遺跡群と捉えるべきであり（仮に須玖丘陵部の遺跡群とする）、その場合、南北1.8km×東西0.7kmという非常に巨大な遺跡群となり（吉留秀敏1999「福岡平野の弥生社会」『論争 吉備 シンポジウム記録Ⅰ』考古学研究会）、比恵・那珂遺跡群とは異なり、「王墓」が存在することや、周囲に青銅器埋納遺跡が分布することから、より政治的・祭祀的なセンター機能を有する大集落と位置付けることができる。須玖岡本遺跡の北側の丘陵前面の低台地上には、須玖永田遺跡、須玖坂本遺跡、須玖五反田遺跡、須玖唐梨遺跡、黒田遺跡、須玖楠町遺跡、須玖尾花町遺跡などの遺跡群が径600mの範囲で分布する。弥生中期後半から遺構群があるが、盛期は後期前葉以降から弥生終末期までであり、特筆すべきは、この範囲では何処を掘っても青銅器やガラス製品の鋳型や中子、取瓶などの鋳造関係遺物が多数出土することであり、まさに弥生の青銅器工業団地ともいいくべき様相を呈する状況である。これらは一連の、一つの遺跡群であり（仮に須玖低地部の遺跡群とする）、その内部を弥生後期～終末期の直線的な溝が縦横に走る状況が想定され、日本列島最初の「都市」的な集落とする評価もある（武末純一1998「弥生環濠集落と都市」『古代史の論点』3 都市と工業と流通 小学館）。いずれにしても特殊な集落であり、弥生時代後期の「奴国」の中核と考えられる。これら須玖低地部の遺跡群と須玖丘陵部の遺跡群は、同時に存在し、互いに異なる機能を持つ大集落として相補う形で存在した可能性がある。一方、比恵・那珂遺跡群は同様に巨大な集落であり、須玖遺跡群ほどではないが青銅器生産関係遺物が多く出土することや、縦横に溝が走行することなど類似する点も多いものの、銅鏡副葬や青銅器埋納がほとんど見られない点で異なり、弥生時代においては政治的祭祀的センター性は顕著ではなく、むしろ比恵遺跡群北半に広がる高床倉庫と考えられる掘立柱建物群の存在や（比恵7・6・58・35・48次など）、弥生中期中頃に成立し中期後半まで機能した「運河」的機能を有する条溝群の存在（福岡市埋蔵文化財調査報告書第596集、比恵15次報告）などから、結節点としての交易・交通の拠点としての性格が強いと考えられる。また、比恵・那珂遺跡群では青銅製鋤の出土が多く、この遺跡内では实用性の高いをされていた可能性がある。水銀朱の原料である多量の辰砂の出土（比恵57次）など、特異な遺物の出土もみられる。那珂23次では弥生中期末の超大型建物があり、前面の大溝では丹塗器などの多量の祭祀的な土器の廃棄がみられるが、この地区は必ずしも比恵・那珂遺跡群の中核ではなく、逆に言えば、このような大型建物は集落内にいくつも存在した可能性がある。比恵・那珂遺跡群の中核地区は比恵遺跡群中央東側の「環濠」群であり（鏡山猛1956「環濠住居址論考」『史源』67）、弥生後期初め（？）頃の1号環濠をはじめ累代の方形環濠があり、現在では類例から首長居館に類するものとされている（2号環濠は弥生終末～古墳前期）。また比恵遺跡群では井戸の検出数が非常に多く、集住と関連するものとみられる。比恵・那珂遺跡群と須玖遺跡群の間には、井戸遺跡群があり、弥生時代中期前半（須玖I式）頃より集落の展開がみられ、近年の調査では弥生中期後半の陸橋と門柱を有する大溝が検出され、環濠集落になる可能性もある。弥生中期から後期前半までの資料は北半に限られているが、弥生後期中頃～古墳前期前半の遺構・遺物は広範囲に広がり、南北1.0km×東西0.2-0.4kmの20ha以上の集落となる。銅鏡や銅鏡の鋳型も出土し、青銅器生産も行う、規模的にも拠点的な集落と捉えることができるが、比恵・那珂遺跡群や須玖の丘陵部から低地部の遺跡群はこれのさらに上位に来ることが留意される。比恵・那珂遺跡群の1.5km東の、御笠川の対岸には雀居遺跡があり、弥生後期中頃～終末の環濠集落は大型建物を含む掘立柱建物群を伴い、大量の土器と多様な木製品が出士している。木製品には組合せの机や、弧帶紋を有する短甲、装飾盾があり、あるいは楽浪系の青銅製馬鐸など、特異な遺物がある。首長層に限る遺物とみられるが、今のところ青銅器生産の証拠はなく、立地的にも農業に基づく集落であろう。比恵・那珂遺跡群の傘下の集落であろうか、雀居遺跡は、弥生早期（銅文時代晩期末）から古墳前期前半まで継続的に続く集落遺跡であるが（今のところ弥生中期後半から後期前半は不明）、微妙に各時期の立地をえているようであり、中心的な集落とは言えない。比恵・那珂遺跡群の南東1.5kmには板付遺跡があり、弥生早期～弥生前期の大規模な水田を伴い、

初期の環濠集落として著名である。弥生前期末ないし中期初頭の青銅器を副葬する墳丘墓の板付田端遺跡の存在や遺構・遺物の検出状況から弥生中期まで拠点的な集落であったようである。弥生中期後半には、前期の環濠を切る「T」字形の構造があり、首長居館に採用される方形環濠の先駆けとみられる。ところが弥生後期以降は遺構の分布はやや薄くなる傾向になり、拠点的機能を失って一般の農村に変容し、むしろ比恵・那珂遺跡群や須玖遺跡群の衛星集落的な存在となる。弥生中期後半から古墳前期の比恵・那珂遺跡群の周囲は、雀居遺跡や板付・諸岡・高畠遺跡群のような傘下の農村がある一方で、台地の際に接する低地や御笠川の対岸にも水田を經營しているようである。那珂遺跡群の東、諸岡川の対岸には那珂郡体・那珂深ラサ遺跡があり、古墳時代初頭以降の広い水田がある。水田区画が特異な小区画であることが注意される。大規模な井堰や水路が検出されている。安定した水田面として存在したことを考えすれば、上限は弥生後期に遡る可能性もある。比恵遺跡群の北端、比恵4次（瑞穂遺跡）では、弥生時代と古墳時代の水路が検出されており、前面に広がる低地部は水田として利用されている可能性が高い。比恵遺跡群の北東1km、御笠川を挟んだ東比恵3丁目遺跡では、弥生中期中頃～後期前半の広大な水田が検出されており、經營規模から比恵遺跡群との関連が考慮される。その他、那珂遺跡群の東、御笠川の対岸の東那珂遺跡周辺でも今後水田が検出される可能性があろう。

弥生時代終末でも新しい時期になると、「奴国」の中核であった須玖の広大な遺跡群は衰退し、遺構数は激減する。弥生時代青銅器の生産やその祭祀が途絶したことも関係であろう。これと交錯するように、比恵・那珂遺跡群の遺構分布は若干増大し、先述の「道路」の造営を一つの軸として新たな集落の再編成が行われたらしい。このような動きの中で福岡平野最古の古墳である全長85mの前方後円墳である那珂八幡古墳が那珂遺跡群の中央に築造され、「奴国」の政治的センターは比恵・那珂遺跡群に移動したと考えられる。そのほか、比較的大型の方形周溝墓が弥生終末期から古墳前期にかけて造営されているのが注目される。「奴国」の中核が海に近い北側に移動したのと同時に、海沿いの砂丘地に新たな大集落が出現する。博多遺跡群や堅粕遺跡群がそれであり、博多遺跡群などは弥生時代から集落は存在するが、弥生終末から古墳前期にかけてこれらは非常に濃密な大集落に成長する。方形周溝墓群の造営も行われる。特筆すべきは、東海西部系（S字甕など）、播磨型庄内甕、秦浪系漢式土器、韓半島南～西部系土器、山陰系土器といった列島内外各地の多系統の撒入土器が出土していることである。港町的な、交易のセンター性を有した集落群とすることができるよう。博多遺跡群では、当時としては進んだ技術による鉄器生産が行われたことも鍛冶関連遺構・遺物の検出から判明している。博多遺跡群、堅粕遺跡群および比恵・那珂遺跡群は、弥生終末から古墳前期前半の北部九州の上器様式の変容の過程で、畿内系上器群を受容する際のセンター的な遺跡群である。筑前型庄内甕、北部九州型布留甕、小型精製土器群などの、より洗練された畿内系上器群を九州の他地域よりも一足早く受容、在地生産したとみられ、一部は九州各地にも搬出している可能性がある。北部九州における畿内系土器の製作技法は、まずこれらの遺跡群を経由してから各地に伝播した可能性が高い（久住猛雄1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」「庄内式土器研究」XIX 庄内式土器研究会）。また那珂八幡古墳は九州最古の古墳であり、九州各地の前期古墳のプランに影響した可能性もある。弥生終末から古墳前期中頃までの「奴国」の中核は比恵・那珂遺跡群であり、『魏志倭人伝』に見える3世紀の中国の使者が「邪馬台国」への途中、「奴国」を訪問する際には、博多遺跡群を経由して、ここに逗留した可能性が高い。ところが、比恵・那珂遺跡群の隆盛は古墳前期中頃を以て終了し、以後の遺構数は激減し、福岡平野の中核的な集落は何處に移ったか今のところ不明な状況である。前期中頃以降の首長墓である卯内尺古墳・老司古墳（南区）、安徳大塚古墳（那珂川町）が那珂川流域中～上流にあることから、中心的な集落も大陸部へ移動した可能性が示唆される。古墳前期中頃には、有力な集落が一齊に衰退しており、なんらかの社会的・政治的変動があった可能性がある。博多遺跡群、堅粕遺跡群、雀居遺跡、井尻遺跡、やや離れる多くの輪式系土器の出土から対外交渉港と目される西新町遺跡（早良区）もほぼ同じ時期に集落が消滅するか、規模を縮小する。

その後の比恵・那珂遺跡群では、無人に近い状況がしばらく続いたようであるが、5世紀末前後の劍塚北古墳の築造頃から集落が再開する。6世紀第2四半期の東光寺劍塚古墳は三重の周溝を巡らす全長75mの前方後円墳であり、この築造頃から那珂台地で有力な集落が形成されるようである。6世紀後半になると、比恵・那珂遺跡群の範囲全体に堅穴住戸、掘立柱建物、構などの遺構が展開するようになる。6世紀末以降、「那津官家」の可能性が指摘される比恵8次の大型倉庫群と多重柵列をはじめとして、大型の掘立柱建物や多重柵列がいくつも展開する状況となる。『日本書紀』の「筑紫大幸」の根拠地とする説もある。那珂22次などでは、九州では最古の部類に属するこの時期の瓦が出土しており、寺院や官衙が存在した可能性が高い。さらに7世紀中頃～末頃には正方位の溝が那珂台地を縦横に走行する可能性高く、『日本書紀』の「長津宮（岩瀬宮）」になる可能性も今後検討されるべきであろう。8世紀（奈良時代）の遺構も多く、土器を多量に廃棄した大戸址が多く見られ、律令制下の那珂郡の郡衙がここに存在した可能性もあり、今後の発見が待たれる。なお、6～7世紀の状況については、報告書の末尾に関連する考察を加えたのでそれも参照されたい。

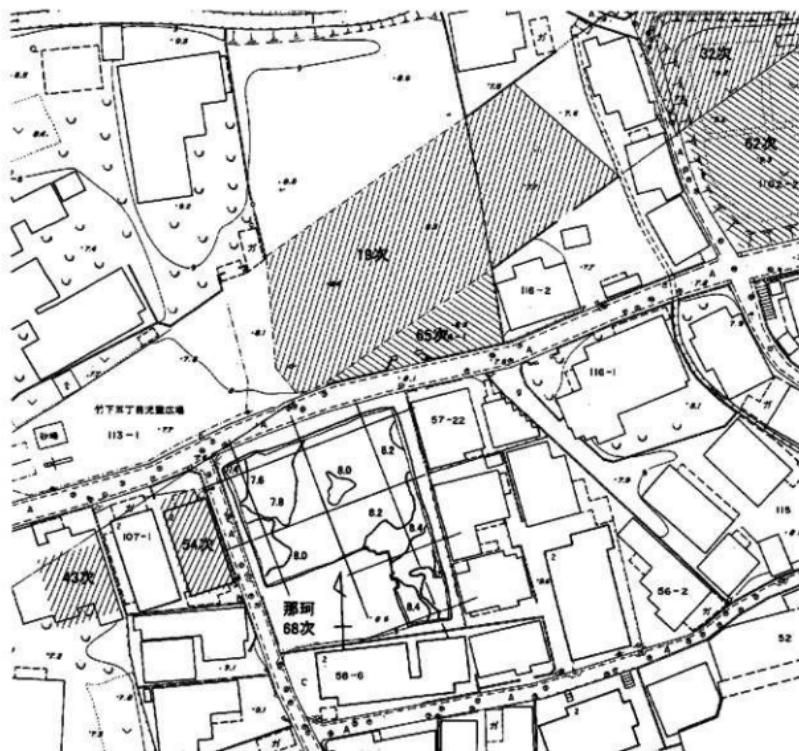
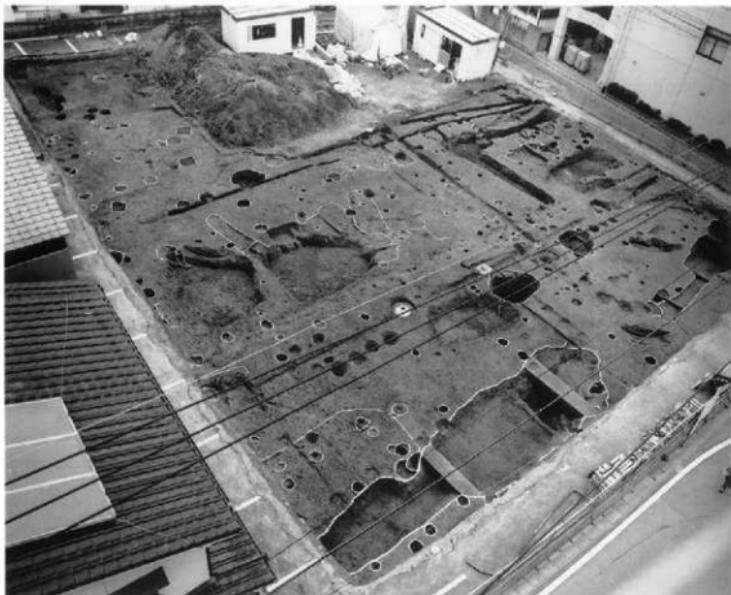


Fig. 2 那珂68次調査地点の位置 (S=1/750)



Ph. 1 調査区全景（北東から）



Ph. 2 調査区北半（西から）

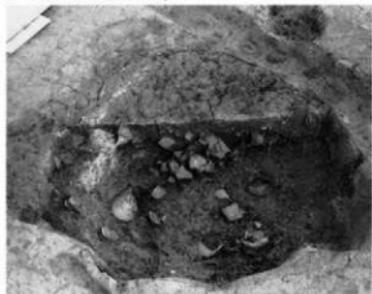


Ph. 3 調査区南半（西から）

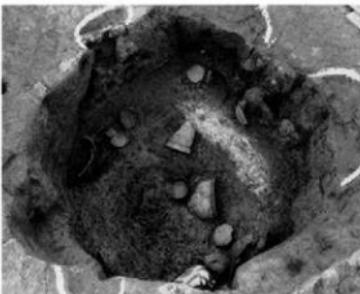
### III. 調査の記録

#### 1. 調査の概要

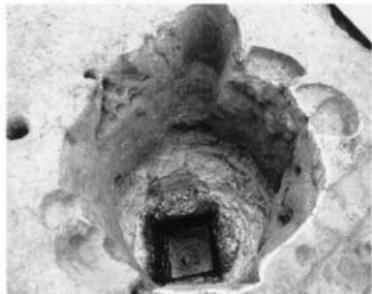
調査地 (Fig. 2) は都市計画道路竹下前線に面し、調査以前は駐車場として利用されていた。それ以前は社宅アパート、あるいは共同炊事場として利用され、戦中は防空壕が作られた場所でもあり、近年の搅乱と削平が著しい。調査前の標高は8.4~8.6m前後で、南・東が若干高い。現地表下の厚さ40~70cm前後の、上からアスファルト・パラス・客土・旧表土を除去したところで橙色の鳥栖ローム面となり、これを遺構検出面とした（なお調査区の層序についてはFig. 15, 18を参照）。検出面のロームは上部のソフトロームが削平され、ハードロームないしその下の浅黄橙（黄白）色粘土質バミスを含む地山で、遺構の残存状況も合わせて考えると（堅穴住居は1棟のみ貼床を検出）、ちょうど1m前後の削平が考えられる。遺構検出面の標高は7.4~8.5mである (Fig. 2)。なお調査対象地は本来開発申請地の南半のビル建設部分だけであったが、申請地南東部分では表土除去直下で遺構が検出され、しかも大型の建物址の存在が判明したため、検出面の浅さからビル建設に伴う諸種の工事ために遺構を破壊する恐れがあるということで、関係者の承諾を得てこの部分も拡張して調査を実施している。なお調査区内は任意の座標軸を設定して記録作業を行っているが、国土座標系（福岡市教育委員会設置の那珂地区測量基準杭より求める）との関係では、任意座標X=0, Y=0では国土座標X=62930.074, Y=-52310.909、X=0, Y=-20ではX=62936.886, Y=-52292.098、X=7, Y=-23ではX=62931.327, Y=-52286.897である。



Ph. 4 SE05上部遺物出土状況（北から）



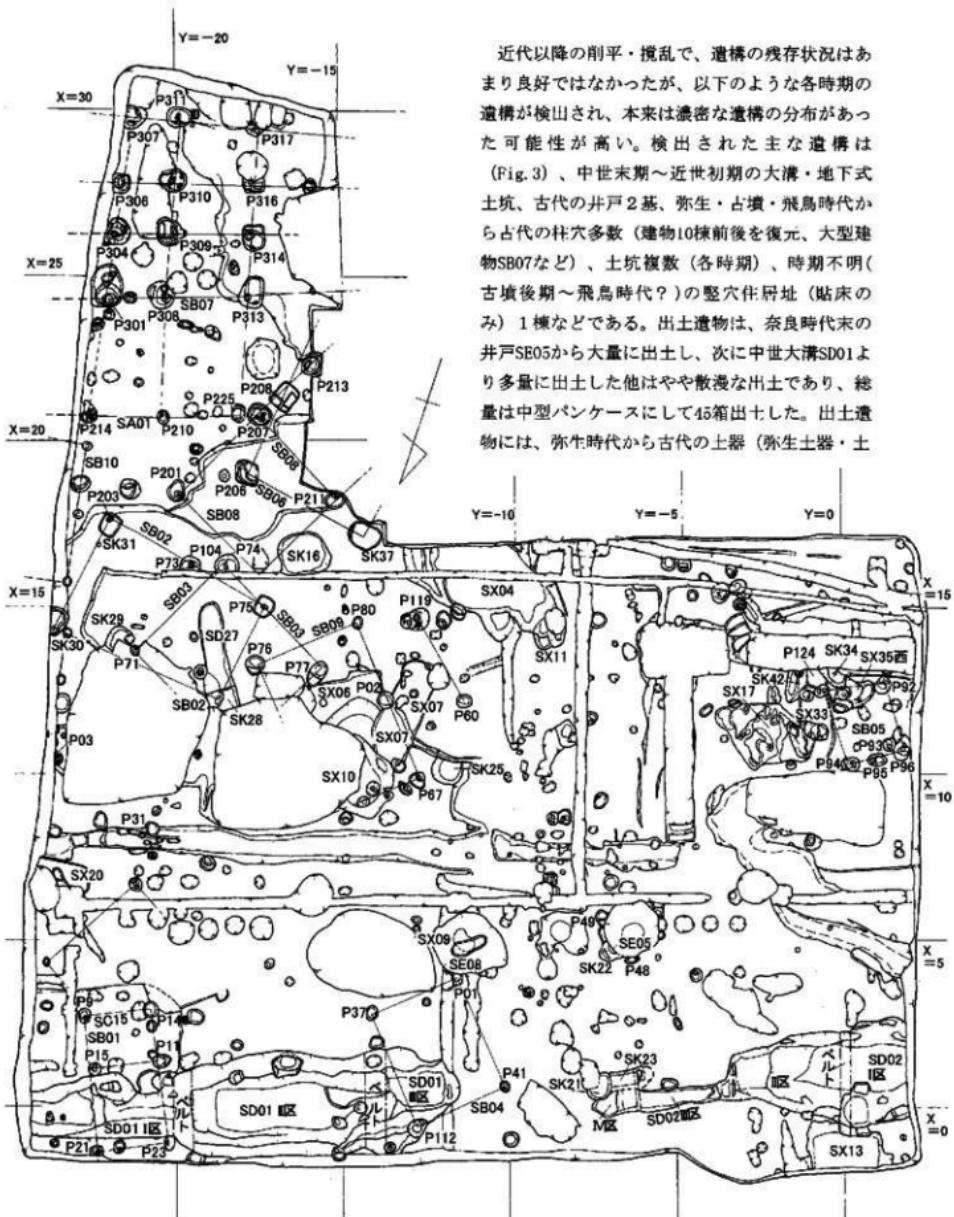
Ph. 5 SE05上層下部遺物出土状況（南東から）



Ph. 6 SE05完堀状況（西から）



Ph. 7 SE05井戸側（東から）



近代以降の削平・搅乱で、遺構の残存状況はあまり良好ではなかったが、以下のような各時期の遺構が検出され、本来は濃密な遺構の分布があつた可能性が高い。検出された主な遺構は (Fig. 3) 、中世末期～近世初期の大溝・地下式土坑、古代の井戸 2 基、弥生・古墳・飛鳥時代から古代の柱穴多數 (建物 10 棟前後を復元、大型建物 SB07 など) 、土坑複数 (各時期) 、時期不明 (古墳後期～飛鳥時代?) の竪穴住居址 (貼床のみ) 1 棟などである。出土遺物は、奈良時代末の井戸 SE05 から大量に出土し、次に中世大溝 SD01 より多量に出土した他はやや散漫な出土であり、総量は中型パンケースにして 45 箱出した。出土遺物には、弥生時代から古代の上器 (弥生土器・土

Fig. 3 調査区全体図 (S=1/150)

師器・須恵器)、中世～近世初期の陶磁器・土師器、古代～中世の瓦、中世以降の鉄製品・鉄滓、古代の木製品(檻・柵・串状木製品など)、種子(井戸出土)などがある。以下、各遺構について記述するが、紙幅の都合上、主要な遺構についてのみ報告し、その他の遺構や、今回の報告で記述しきれない情報については、埋蔵文化財センターに記録類が収蔵される予定があるので、それらを活用されたい。また、出土遺物については、遺構の報告の後にまとめて記述している。これについても、時間および紙幅の制約から図化可能な遺物の一部しか報告できていないことをあらかじめ断つておきたい。御寛恕を請う。

## 2. 遺構の調査

### 1) 井戸址

- ・SE05(Fig. 4, Ph. 4~7)

調査区中央やや北西で検出

した。上面径 $1.6 \times 1.7\text{m}$ の不整円形、検出面からの深さ $3.2\text{m}$ を測る。掘方底の標高は $4.7\text{m}$ 。断面は、基本的には先ずぼくら気味の円筒形だが、鳥栖ロームと八女粘土の境の標高 $6.4\text{m}$ 前後で大きく抉れ、地山が崩落している。ただしこの部分にも遺物の出土が見られた(Ph. 8)。上面検出時から遺物の出土がきわめて多く(Ph. 4, 5)、上層から中層にかけて完形に近い状況の土師器・須恵器がいくつかの廃棄単位に分かれて出土している。ただし、型式(時期)的には、層位によって分離された各遺物群は明確には新古の差は無く、井戸の埋没に伴う比較的短時間の連続的な廃棄とみられる。下層には井戸側が残存していた(Ph. 7)。木質の遺存状況はやや良好で、一部崩れたが何とか取

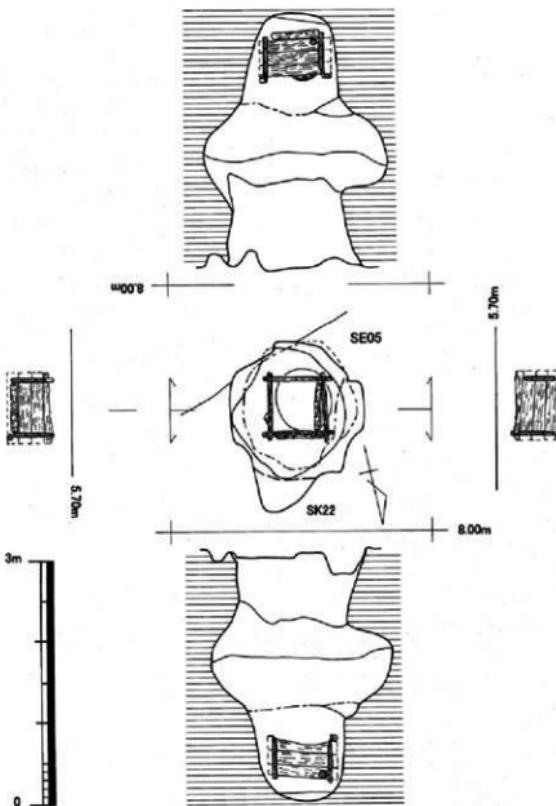


Fig. 4 SE05平面図・断面図 (S=1/60)



Ph. 8 SE05崩落部遺物出土状況 (北東から)

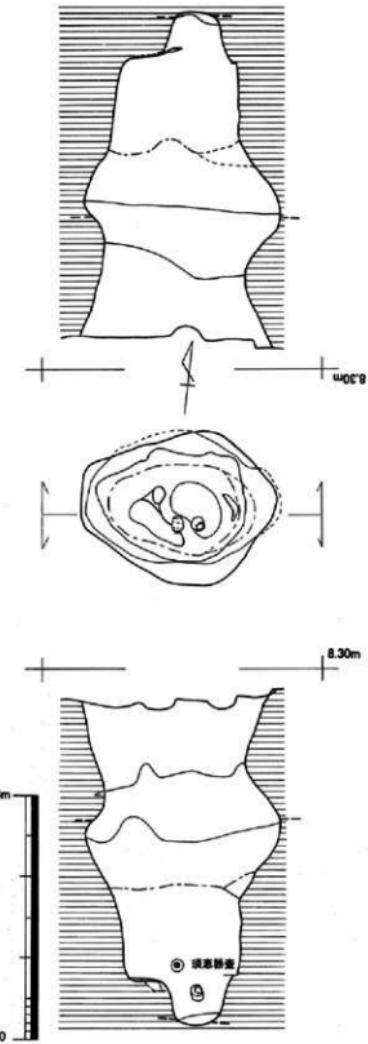


Fig. 5 SE08平面図・断面図 (S=1/60)

り上げが可能な状況であった。井戸枠は17cm前後×85cm前後の長方形の横板にはぞ溝を切ってまさに「井」字状に組み合わせたもので、各辺3(段)、東辺は4枚(腐朽のためか高さ8cmのみ残存。北辺上部にも痕跡的なもう1枚の板材辺あり)残存している。本来はもう少し上まで井戸側があった可能性がある。「角型・横板・無柱式井筒」である。北辺では用途不明だが、これら主要な長方形板材の下に、長さ60cm程度の杭状の材があり、同様の材が西辺の内側にせり出した形で出土している。なお井戸枠の内法は60×62cm、残存高は62cm前後である。なお井戸側の内側下には曲物などはなかった。また、井戸側の残存していた下層出土の遺物は比較的少なく、若干の破片のみである。また北側には深い柱穴(土坑?)である(検出面より108cmの深さ)SK22を切っているよう見えたが(井戸平面図の北側の半円形に突出した部分)、あるいはSE05に伴うステップ的な施設



Ph. 9 SE08発掘状況(北から)



Ph. 10 SE08最下層遺物出土状況(北から)

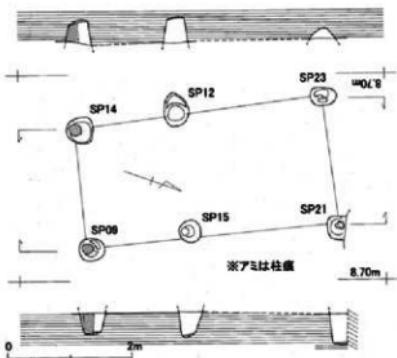


Fig. 6 SB01平面図・断面図 (S=1/80)

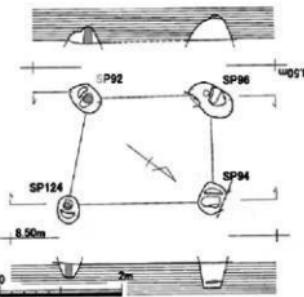


Fig. 7 SB05平面図・断面図 (S=1/80)

の可能性もある（ただし遺物は弥生土器片を出土）。なお出土遺物から、SE05は9世紀初頭ないし前葉頃に廃棄された井戸と考えられる。

・SE08 (Fig. 5, Ph. 9, 10) 調査区中央や北で検出。SE05の4m東に位置する。上面東西2.5m×南北1.9mの不整楕円形。深さは検出面より4.1m強を測る。標高6.45m前後（深さ1.6m前後）の鳥栖ロームと八女粘土の境界前後で若干外に広がるが、標高4.4m付近まで先ずばまり気味の筒状の断面。標高4.4mで西側がテラス状となり、東半分のみ約60cmさらに落ち込む。最底面は八女粘土より下の灰青白色（灰白褐色）硬砂シルト層となる（標高4.0m以下）。下部の断面形から井戸側のあった可能性も捨てきれないが、それを思わせる木材などの出土はなかった。一応、素掘りの井戸と考えておく。遺物は上層で破片を中心にやや多くの土器片が出土したが、良好な完形を含む一括資料は意外と少ない。中層以下特に下半層で、遺物の出土は散漫となるが、むしろ完形に準ずる遺物が出土し、最下層では須恵器の細頸壺が2点出土している (Ph. 10)。

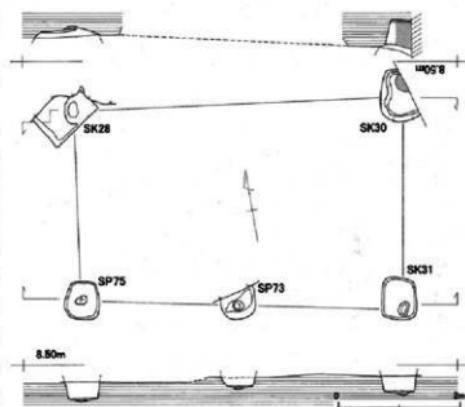


Fig. 8 SB02平面図・断面図 (S=1/80)



Ph. 11 SB02(後方)・SB06(前方)検出状況 (南西から)

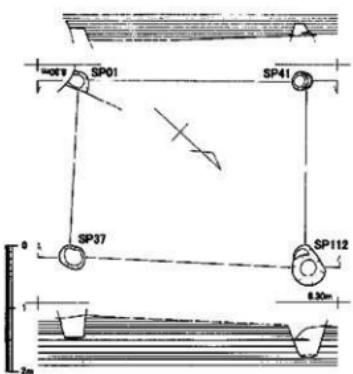


Fig. 9 SB04平面図・断面図 (S=1/80)

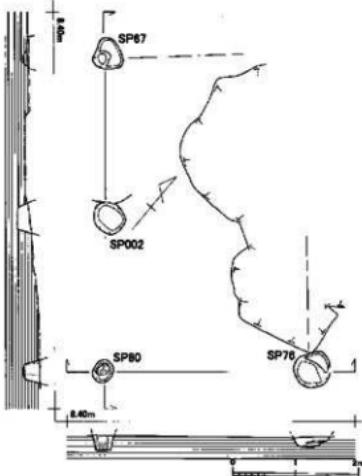


Fig. 11 SB09平面図・断面図 (S=1/80)

SE08の時期は、出土遺物から、SE05出土土器群との型式的関係が微妙ながらも若干古いと考えられることから、8世紀後葉ないし天葉頃に庭園されたものと考えられる。

## 2) 挖立柱建物 (Fig. 6~15)

掘立柱建物は9棟+ $\alpha$ を復元した。現場で柱穴の柱並びやプラン、深さ、覆土の色・質に留意して、調査中に推定したものが大半である。なお、柱穴(SP)のほとんどについて、検出時に平面的な精査を行い、その土色・質、柱痕跡や抜き後の有無をチェックしメモを残した。調査区は搅乱が多く、あつたはずの肝心な部分の柱穴が不明である場合が少なくないが、場合によっては3柱穴でも大胆に建物址を復元した。

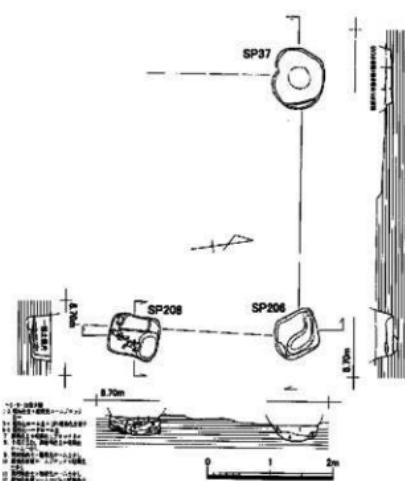


Fig. 10 SB06平面図・断面図 (S=1/80)

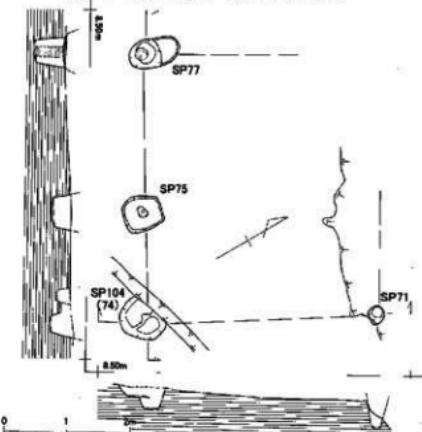
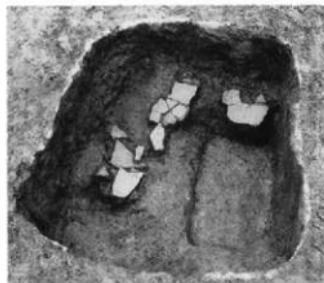
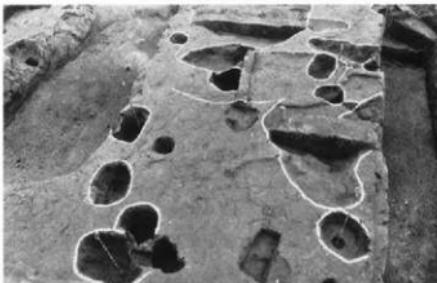


Fig. 12 SB03平面図・断面図 (S=1/80)



Ph. 12 SP208土器出土状況（北から）



Ph. 13 SB05検出状況（西から）

・SB01 (Fig. 9) 調査区北東で検出。1×2間、2.1×4.15m。N(以下磁北)-26°-W。6～7世紀の可能性のあるSC01の貼床を切り込み、柱穴の埋土は黒褐色～暗褐色土で6～8世紀の範疇か。柱穴の遺物は弥生中～終末期の土器細片があるが磨滅し、時期を示さないだろう。

・SB02 (Fig. 8) 調査区南東で検出。一部搅乱で不明だが、推定1×2間、3.4×5.4m, N-80°-W。方位はSB06に類似し、伴うか (Ph. 11)。SB06が古墳初頭前後と思われ、これに近い時期であろうか。柱穴の遺物には弥生土器の細片が多いが、わずかに古式土師器の破片がある。SK30上層より須恵器片が出土するが、土層から別構造が終んでいる可能性が高く、伴わない。柱穴埋土は黒褐色土主体。

・SB05 (Fig. 7) 調査区南西で検出 (Ph. 13)。1×1間、1.8×2.4m。柱筋がややずれるがさらに東の柱穴へもう1間延びる可能性もある。N-37.5°-W。柱穴埋土は黒(暗)褐色土主体。柱穴からは弥生中期土器の細片をわずかに出土。弥生時代の範疇の可能性が高い。

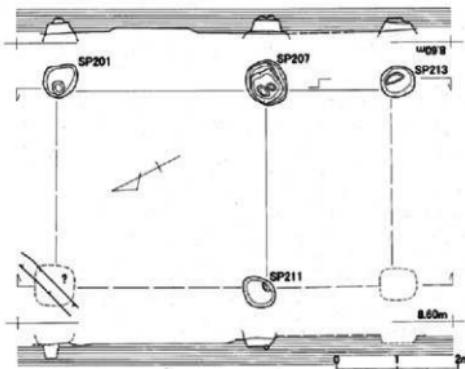


Fig. 13 SB08平面図・断面図 (S=1/80)



Ph. 14 SB07柱穴検出状況（南から）

・SB04 (Fig. 9) 調査区北辺中央で検出。SD01に切られる。1×1間、 $2.95 \times 3.75$ m。N-41°-W。柱穴埋土は一部黒褐色、暗褐色土主体で古墳時代後半～古代の可能性が高いが、SP37中央には灰褐色砂質土があり（ただし搅乱の重複の可能性がある）、中世以降の可能性も若干ある。柱穴の遺物には、弥生～古代の土器細片がある。

・SB06 (Fig. 10) 調査区南東で検出 (Ph. 11)。1×1間以上、 $4.2 \times 2.6$ m以上。柱間の長さや柱穴規模から南側に何間か延びる可能性が大きい。N-81°-W (N-9°-E)。

SP37は遺存状況が悪いが、中央に粗い砂を含んだ抜き跡があり（他は黒褐色土）、他の柱穴は黒（暗）褐色土主体の埋土だが、土層の観察では柱痕は無く、やはり抜き取られているようである。SP208は下層に貼り付いて壺形土器の下半部が出土し (Ph. 12)、層位的には掘方埋土下層にあり、建物築造時の祭祀であろう。SP208の下層出土土器は古墳初頭前後の型式で、建物の時期を示す。他の柱穴出土遺物は弥生土器・古式土師器の破片（細片）が多い。

・SB09 (Fig. 11) 調査区南東で検出。1×2間、 $3.25 \times 5.0$ m。N-39°-W。柱穴埋土は暗褐色土主体で一部

黒褐色土。柱穴は削平により残りの悪いものが多い。柱穴出土遺物には、弥生土器・土師器の細片が見られるほか、SP02には須恵器片（6～7C前半）があり、古墳時代後期から古代前期（奈良時代）までの建物の時期が考えられる。

・SB03 (Fig. 12) 調査区南東で検出。1×2間、 $3.75 \times 4.3$ m。N-60°-W。SB02と重複するような関係となる。柱穴埋土は黒褐色土主体で一部暗褐色土。柱穴出土遺物は、弥生土器・古式土師器の破片（細片）がある他、須恵器の細片がある。古墳後期～飛鳥時代（6～7世紀）の範疇の建物であろう。

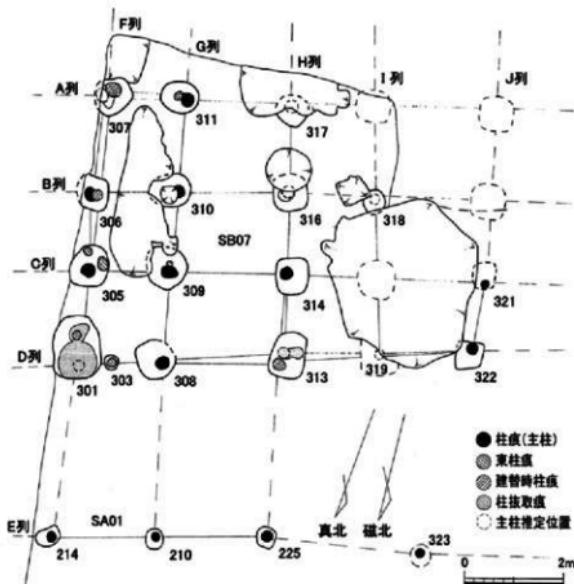


Fig. 14 SB07柱痕・柱位置確認図 (S=1/100)



Fig. 15 SB07柱穴完掘状況（西から）

・SB08 (Fig. 13)  
調査区南東(一部拡張区)で検出。

1×2間、3.2×5.5m、N-27°-E。  
柱穴埋土は黒褐色  
土主体で一部暗褐色土。若干の焼土  
粒を含む柱穴もある。  
柱穴出土遺物は、弥生中～後期  
の土器の破片(細片)のみであり、  
埋土の土色(質)から考えても、弥  
生時代ないしは下っても古墳前期  
の範疇になる建物であろう。

・SB07  
(Fig. 14, 15、  
Ph. 14, 15および表  
紙写真) 調査区  
南東拡張区で検出。  
確認できた範囲で  
は、南北3間×東西  
4間、5.5×8.2m  
となるが、南側は  
さらに延びる可  
能性があり、東西は

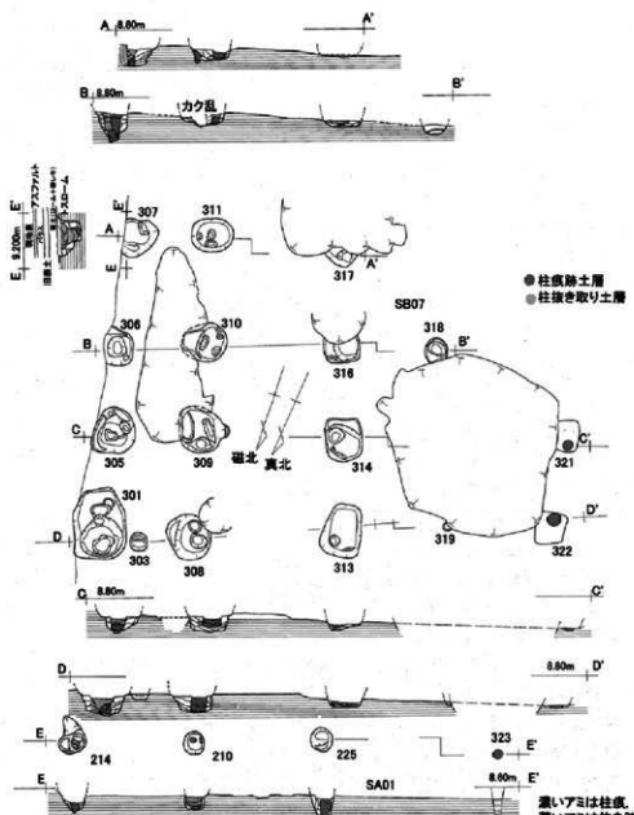


Fig. 15 SB07大型建物完掘平面図(上層)図(S=1/80)

西に延びるかまたは東西2棟の可  
能性(並び倉?)も捨てきれない。また北側には  
3.6mにおいて平行して柵列SA01も検出した。表土直  
下で検出し、遺構の重要性を認識したので、以下  
のような調査方法を探った。まず平面的に柱穴ブ  
ランを検出し、次にこれをわずかに(数cm)下げ  
て(一段下げ)精査し、柱痕跡や柱抜き取り跡を  
確認しこれを記録した(Fig. 14, Ph. 14)。次に  
東西軸で柱穴を半裁し、土層断面を検討記録した  
(Fig. 15)。最後に残りを完掘した(Ph. 15)。柱



Ph. 16 SB01完掘状況(西から)

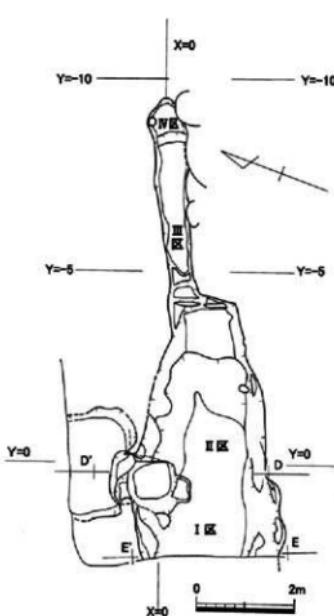


Fig. 16 SD01平面図 (S=1/80)



Ph. 17 SD01土層断面C状況 (東から)

柱があること、建物の廃棄時には多くは柱（柱痕）を残すが一部抜き取りをしていることが判明した（Fig. 14参照）。柱穴は上部が削平され遺存状況は良好でないにもかかわらず、一辺70cm以上の大型の掘方であり、残りの良いSP301は径1mである。なお土層観察による柱痕跡は径20cm強～30cmである。柱穴掘方は略方形ないし不整形（円形）で、方形の掘方を持つ律令期や逆に弥生時代の大型建物とは異なる。柱筋は東西はほぼ平行して描うが（N-74～78°-E）、南北は振れがややある。ただし

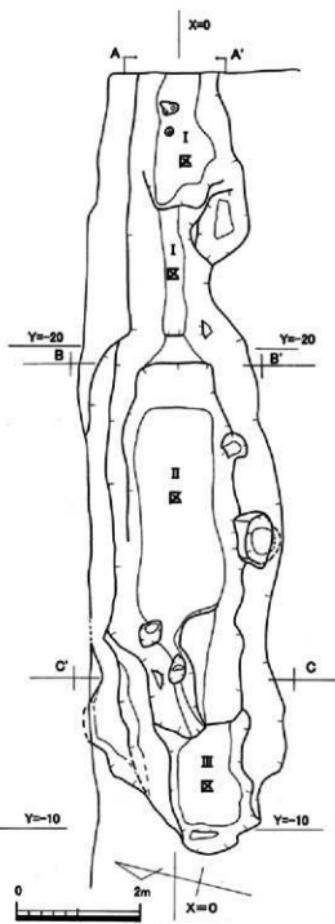


Fig. 17 SD01平面図 (S=1/80)

穴の掘削の際には、掘方と柱痕や抜き跡の遺物を分けるように努力した。これらの作業の結果、この建物は一度建て替えている

こと、同じ柱穴内にも主柱の他に補助的な東

SP307-306-305-301のF列とSP311-310-309-308のG列はほぼ平行でN-9°-E, SP317-316-314-313のH列とSP318-319のI列(やや不確定)はN-12~15°-Eである。SP321-322のJ列(平面のみの確認でやや不確定)は前者の方位に近い。

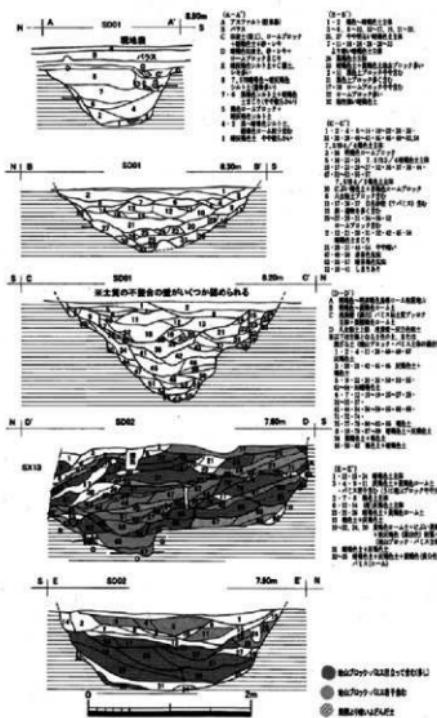


Fig. 18 SD01-SD02 土層断面図 (S=1/60)



Ph. 18 SD02 土層断面E状況 (東から)



Ph. 19 SD02 土層断面D状況 (西から)



Ph. 20 SK13 調査状況 (北から)



Ph. 21 SX13北側東西土層状況 (南から)



Ph. 22 SX13下層西側配石出土状況 (東から)

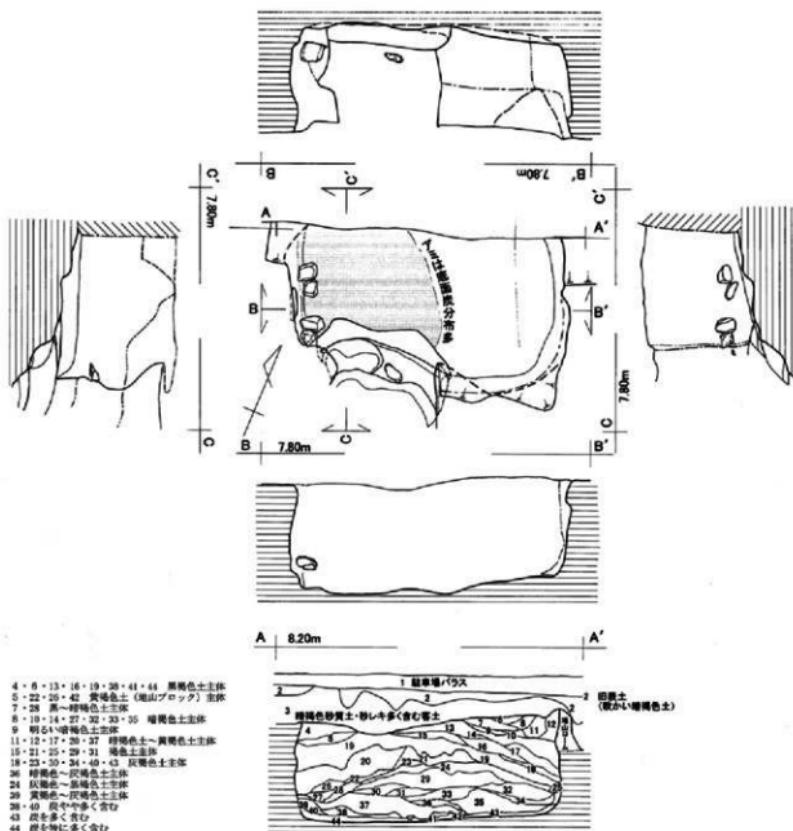


Fig. 19 SX (SK) 13平面図・断面(土層)図 (S=1/40)



Ph. 23 SX13・SD02連結部完掘状況(南から)

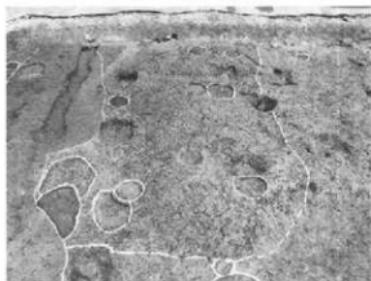
い。SP301は、その掘方内南側と西に接してSP303という2つの東柱がL字状に配置してあること、この柱穴のみ大きな抜き取り跡があることから、この柱穴が大型建物の隅の柱である可能性が指摘できる。この場合、F列が建物の東辺、D列が北辺となるが、南側はあと2間(列)、西側はあと1間(列)ある可能性を想定できる。すなわち、柱穴列の間隔を見ていくと、東西列間ではD-C間は約2.0m、C-B間は約1.6m、B-A間は約2.0mであるが、SP307は柱痕が残り、東柱がSP301と対称には存在しないことから隅の柱とは考えられず、柱穴列間



Ph. 24 SK16土器出土状況（北から）



Ph. 25 SK16下層土器出土状況（北から、ほぼ完備）



Ph. 26 SC01貼床面検出状況（西から）

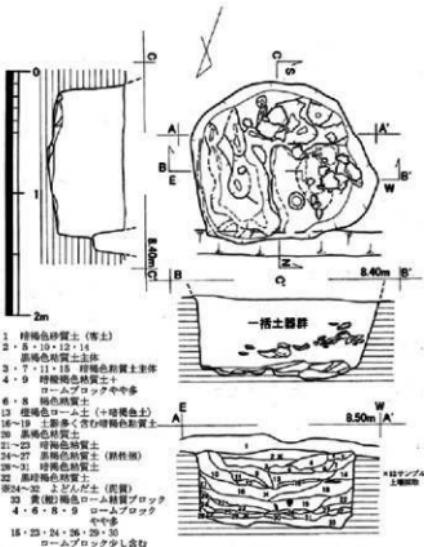


Fig. 20 SK16平面図・断面(土層)図 (S=1/40)

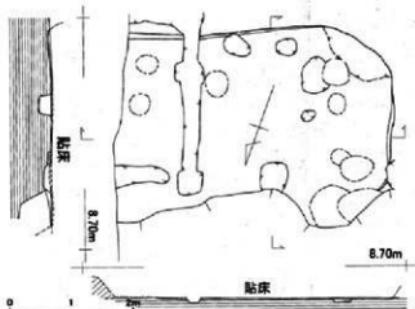


Fig. 21 SC01平面図・断面図 (S=1/80)

の距離の順序で行くと次の列とは約1.6m間隔と考えられ、D-C間は約2.0mであり、さらにもう一列が考えられる。南北の柱穴列間では、F-G間が1.6~1.8m、G-H間が2.2~2.3m、H-I間が1.7~1.8m、I-J間が想定2.0~2.3m前後であり、端のF-G間が1.6~1.8mであることから、次の西の柱穴列との距離は順序からいって同程度になるとすれば、それが建物の西辺になる可能性があろう。残念ながら、南側については完全に敷地外であり、西側は調査対象地外であったが、最後の埋戻しの際に重機で表土を下げて平面的な確認を試みたが、削平と搅乱が著しく、確認できなかった（レベル的に、もし存在していたとしても削平されていると考えられる）。以上の想定で復元される建物の規模は、南北5間×東西5間、柱内の総面積は約90m<sup>2</sup>となり、東住があることも考慮すれば、畿内の宮都などで見つかっている建物に準ずる（やや劣るが）大型の建物となり、きわめて重要な意義を考える必要がある。建物

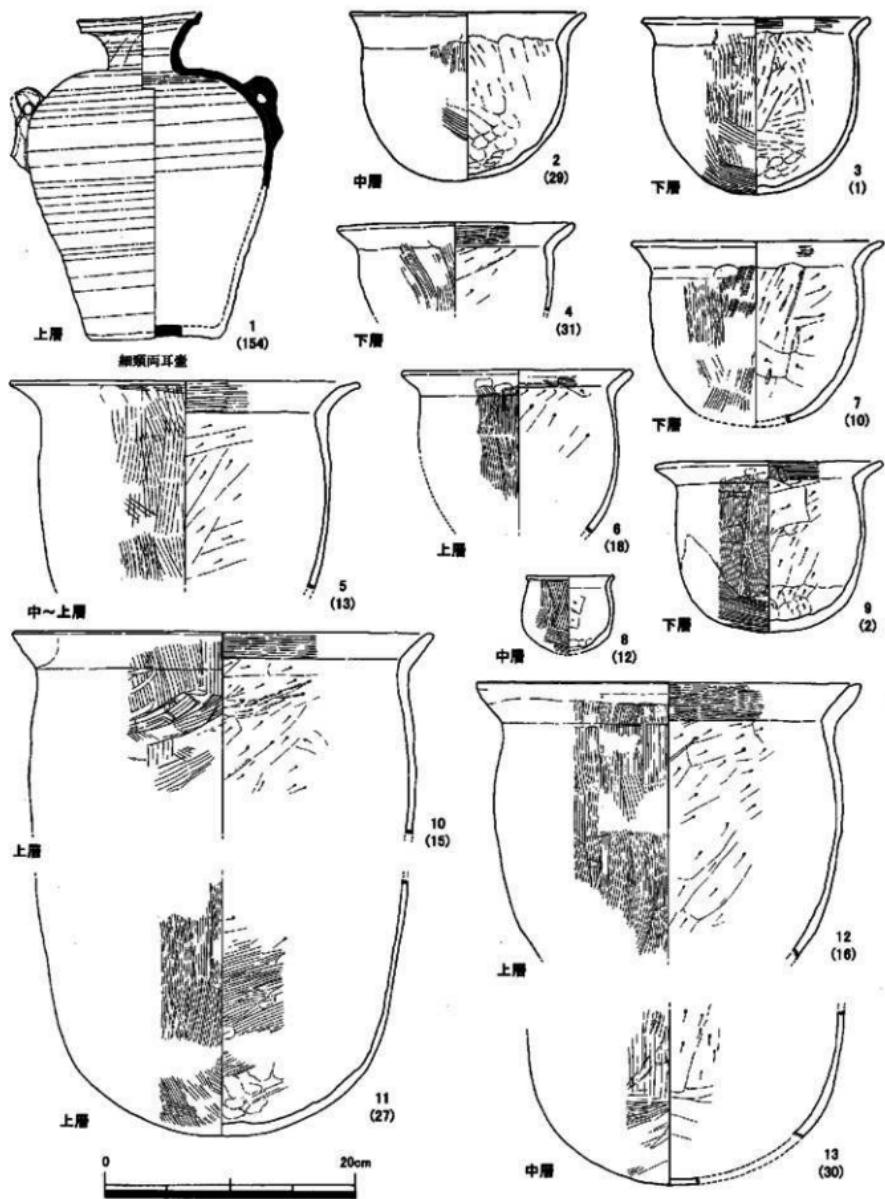


Fig. 22 SE05出土遺物(1) (S=1/4) ・断面黒は須恵器、他は土師器

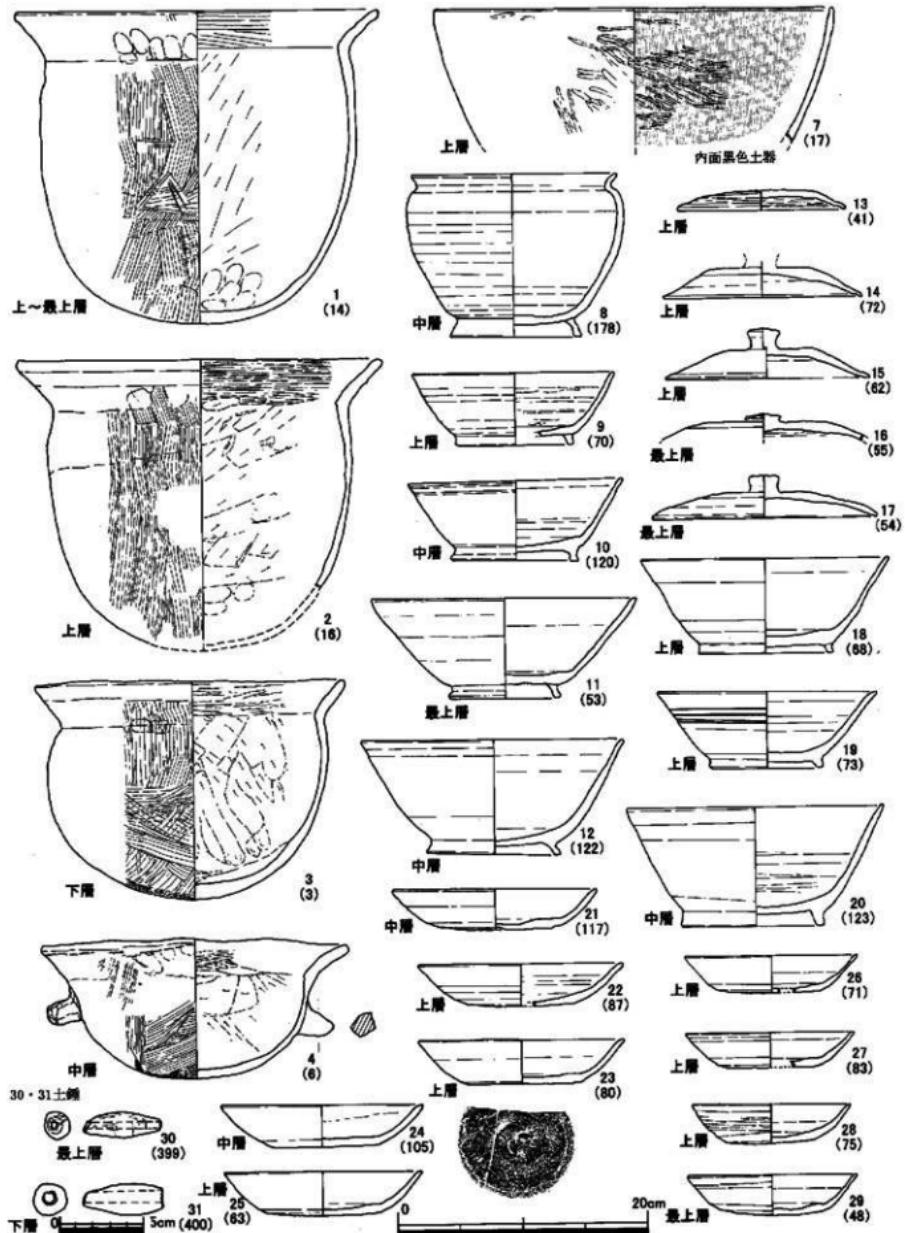


Fig. 23 SE05出土遺物(2) (S=1/4, 1/3) 全て土師器

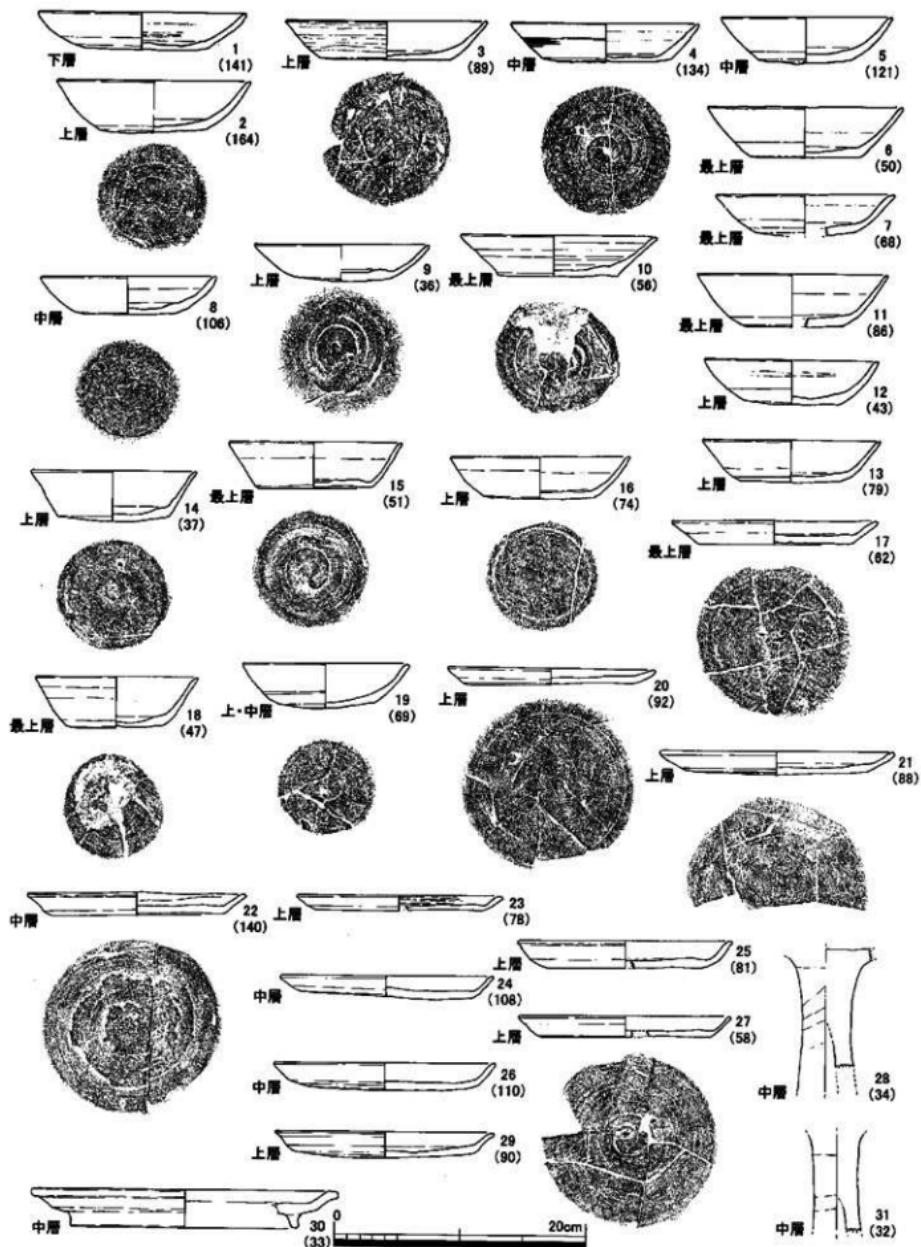


Fig. 24 SE05出土遺物(3) (S=1/4) ・全て土器

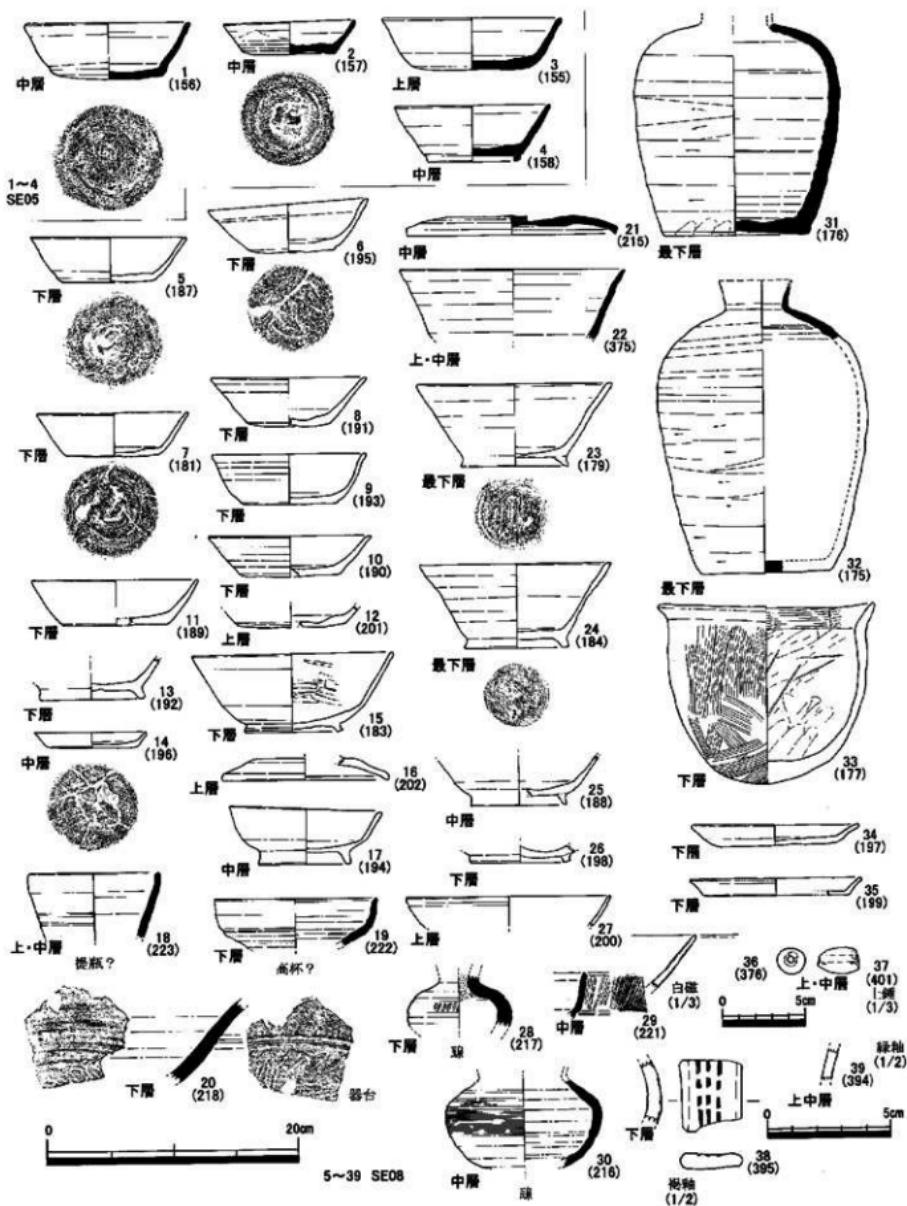


Fig. 25 SE05 (4) · SE08出土遺物 (S=1/4, 1/3, 1/2) · 断面黒は須恵器、未説明は土器

の性格・機能としては、総柱であることから倉庫の可能性もあるが、規模的あるいは官衙的な建物の可能性も考慮すべきである。問題となるのはこの建物の時期である。まず柱穴の埋土は黒褐色土+暗褐色土（これにローム土が若干混入する）で、古墳時代後期～飛鳥時代（6～7C）の遺構の上色・質に近い。柱穴のプランや建物方位からは奈良時代には下ることはないであろう。柱穴からの出土遺物には、弥生土器や古式土師器の破片・細片が多く含むが、もっとも新しい遺物としてSP308の須恵器の甕の破片とSP309の須恵器の壺蓋の破片がある（Fig. 28参照）。前者はタタキの特徴から九州須恵器編年（小田富士雄編年）のⅢA～ⅢB期、後者は型式的特徴からⅢA期新相に比定できる。したがって大型建物SR07の時期は、これらの須恵器を上限とする頃（ⅢA期新相ないしⅢB期）に建造され、最低1回の建て替えを考えて、おそらく一世代以上半世紀程度存続したものと考えたい。こうしたタイプの建物の性格から、隣接地（東および南側）に同様の建物が並び存在していた可能性が考えられ、今後の周辺の調査において注意されるべきであろう。なお、報告の終わりにこの建物の存在から派生する問題について簡単な考察を付したので参考されたい。

### 3) 溝状遺構

・SD01 (Fig. 17, Ph. 16, 17) 調査区北辺中央～東にかけて検出した略東西の大溝。次に記述するSD02との間には障壁がある。延長13mを確認し、調査区外東側へ続く。I区では幅1.3～2.0m、深さ50～70cmの逆台形、I区西半が浅く、東半は若干低くなる。I区からII区にかけて急激に段状に落ち込み、II区は幅広く深い。II区は幅2.8～3.2m、深さ130～150cmを測る。III区は西に向かって立ち上がり、途切れてしまう。次のSD02と異なり、覆土には地山ブロックがあり見られず、暗褐色～灰褐色のシルト質土が主な覆土である（Fig. 18の断面A～C）。土層を詳細に観察すると、土色や土質の微妙な不整合からなる壁状の立ち上がりが複数あり（注意して掘削すると「隙」があらわれる）、何度も掘り返しがされた状況である。遺物は、全体として散漫に出土したが、遺物量は多く、総量は中パンケース5箱強である。溝の時期を示す遺物としては、15～16世紀の龍泉窯系青磁、白磁皿、朝鮮陶磁、瓦質火鉢（火鉢）などがあり、15世紀後半頃の掘削が考えられ、上層から唐津焼が出土し、近世前期の埋没が推定される（遺物はFig. 27参照）。中世後期から近世初期の遺物が主体だが、少なからず弥生土器や古墳後期以降の須恵器などが混在する。特に、6世紀後半～7世紀前半の須恵器が目立ち、SD01はこの時期の遺構を破壊している可能性がある。

・SD02 (Fig. 16, Ph. 18, 19) 調査区北辺西側で検出した大溝。延長9.5mを確認し、西側は調査区外へ続くとみられる。東半のIV区からIII区にかけては細く（幅50～70cm）浅い（深さ10～20cm）が、II区からIII区にかけて幅が広くなると同時に深くなる。II区からI区では、幅1.4～3.2mで、深さはII区東端で20cmであるのがII区中央では100cm前後、I区では150cm前後を測る。なお溝の断面形は逆台形ないし箱形である（Fig. 18の断面E参照）。I・II区の境界前後の溝北辺は、幅90cm前後、底面は階段状となった連結部を有してSK（SX）13に続く（Ph. 23）。SD01に比べて、覆土中に地山ブロックの堆積がきわめて多く（Fig. 18の断面D, E）、I区では中層までの地山ブロック層の上部が面をなしている（断面E）。この堆積はあるいは人為的な埋戻しの可能性がある。少なくとも、SD01のような頻繁な掘り直し、溝浚えは考えられない。なお、北側に連結するSX13とは埋没過程が同時であり、明確な切り合いは認められず、同時に存在した可能性が高い（ただし、上層図の読み方によってはSD02が若干埋没した時点での再掘削の際に、同時にSX13が構築された可能性は残る）。出土遺物は、比較的少なく、上層で散漫に出土した。出土した土師器の壺や小皿、朝鮮陶磁、備前鑄鉢、色絵合子などが溝の掘削から埋没の時期を示す時期と考えられ（Fig. 28参照）、おおむね16世紀前後が考えられよう。

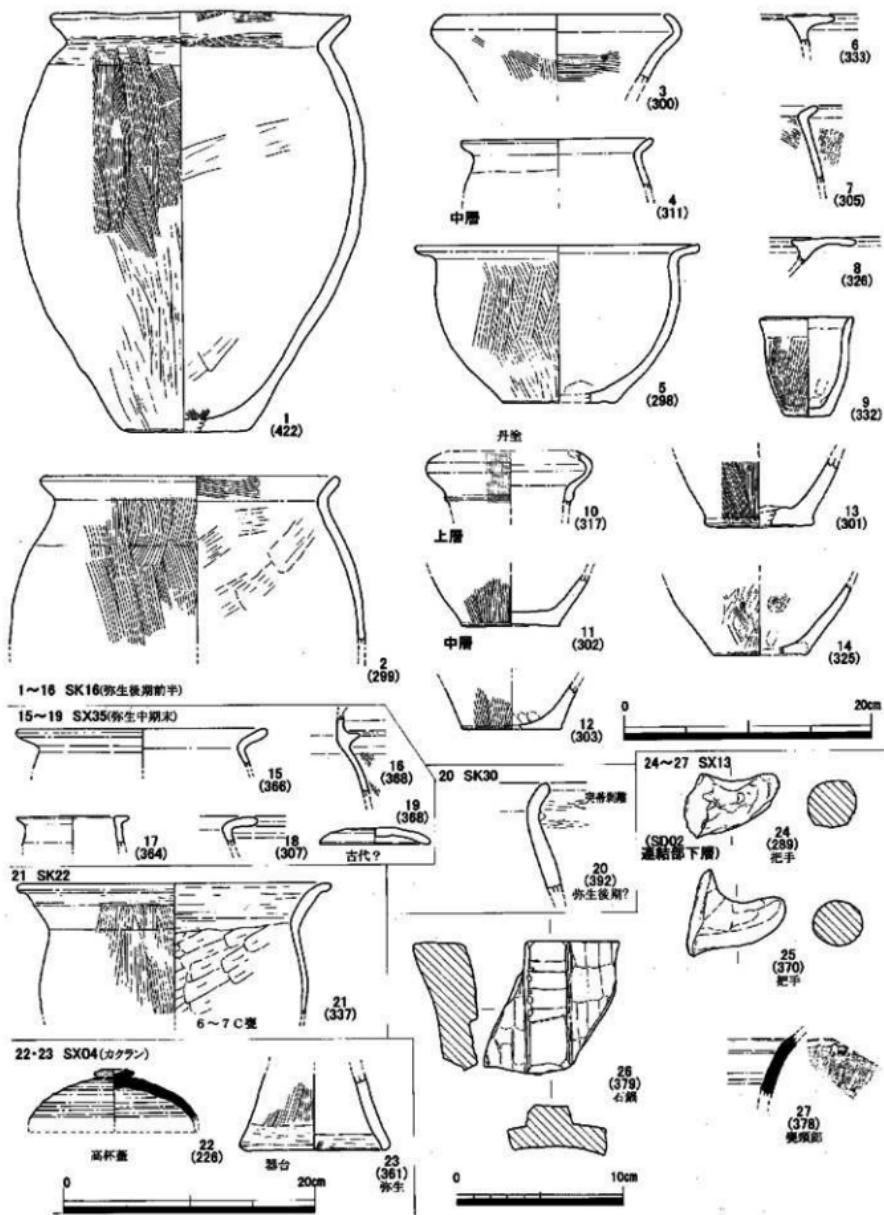


Fig. 26 SK16他出土遺物 (S=1/4, 1/3, 1/2)

#### 4) 土坑、竪穴住居址

・SX(SK)13 (Fig. 19, Ph. 20~22) 調査区北西隅で検出。前述したように南側はSD02と通路状の部分を通じて連結している。北半は対象外のため調査できていない。平面は東西2.3m×南北1.3m以上（推定1.8m）の楕円形に近い略長方形で、深さは90cm前後を測る（連結部は130cm前後）。壁の立ち上がりは途中オーバーハングしている。底面からやや浮いて、西側下端に2個一組の一対の配石がある。底面は厚さ数cmほど炭まじりの土が敷かれており（特に西半部に厚く、炭が多い）、配石はこの貼り土の上に置かれていたようである（不注意で周囲の貼り土を除去して掘削してしまった）。七層は、上から埋戻し、ないしは崩落した状況を呈する。溝と連結するこうしたタイプの中世の土坑は那珂遺跡でもいくつか検出例があり、「地下式土壙」とされ墓の可能性が指摘されている。炭を含んだ貼り土の存在や「枕」とも考えられる配石の存在から、墓とする想定がここでも妥当であろう。出土遺物はあまりないが、SD02との関係や、その連結部出土の遺物などから、16世紀後半頃の時期が考えられる。

・SK16 (Fig. 20, Ph. 24, 25) 調査区南東で検出。平面は東西1.5m、南北1.3mの不整椭円形で、断面形は竪坑状、深さ70cm程度である。底面は凹凸激しく、掘削痕跡を示すと考えられ、十坑として機能した面は掘方底面やや上（33層の上面）であろう。この上によどんだ黒褐色土主体の層である24~32層がある。この上部の中層に土器群の一括廻棄があるが（Ph. 24）、完形品が無く、遺存率の高い甕も完存ではなく、破片が多いことから厳密には二次的な廻棄の可能性が高い。型式的にはやや古い時期の破片が混入しているとみられる（遺物はFig. 26参照）。この上は自然埋没と考えられるが、検出面直下の上層は再びよどんだ黒褐色土となる。なお上層では土器の破片（細片）がやや多く出土したが、良好な出土状況ではない。遺構は1m前後の削平が考えられ、本来の深さは1.7m前後と推定されるが、よどんだ下層の黒土も含め、この土坑の性格が問題となる。井戸としては浅すぎ、貯蔵穴のプランや底面の状況も異なり、ゴミ穴とする程の遺物量は無い。可能性の一つとして「トイレ」を考え、それを検証するために土壤の分析を試みたが（後章の自然科学分析参照）、土壤条件が悪く、有機質遺物が分解しているためかその仮説を検証できなかった。今後、用途不明の土坑についての土壤分析の蓄積が必要であろう。

その他の土坑では、調査区南西で検出したSK35があり、弥生中期末の土器の破片がややまとまって出土した。平面不整形で、東西1.0m×南北1.3m、深さ45cmを測る。

竪穴住居址には、SC01がある（Fig. 21, Ph. 26）。遺構検出時に、ローム土がこの範囲で若干湧つており、また奇妙な剥がれ方をするので地山ではないと考え、精査したところ略長方形のプランとなつたので竪穴住居の貼床の残存と判断した。伴う主柱穴は不明、壁構は無く、カマドの痕跡も検出できなかった。北をSD01に切られ、貼床にSB01の柱穴が切り込む。東側は調査区外に延びる。東西4.6m以上、南北3.4m以上である。SD01のI・II区にIII B期前後の須恵器が多く、本来はSC01に伴うことも考えられ、SB07の方位に近いW-70°-Eであり、同時期の可能性があり、とすればやはりIII B期前後か。

### 3. 出土遺物 (Fig. 22~29, Ph. 27, 28)

紙幅の都合により、以下、各遺物について詳細な説明ができないことを御寛恕頂きたい。遺物の種類等については、挿図中に写真で示したので参考されたい。なお挿図中の（ ）内の番号は収蔵予定番号の下3桁である。Fig. 22~25のSE05の土器群は、9世紀第1四半期の良好なセットである。Fig. 23-8の上師器高台付鉢（増）は類例が少ない。Fig. 25のSE08の土器群は8世紀第4四半期のセットである。小片であるが、Fig. 25-36, 38, 39の白磁、褐釉、綠釉の出土が注目される。同図18~20, 28

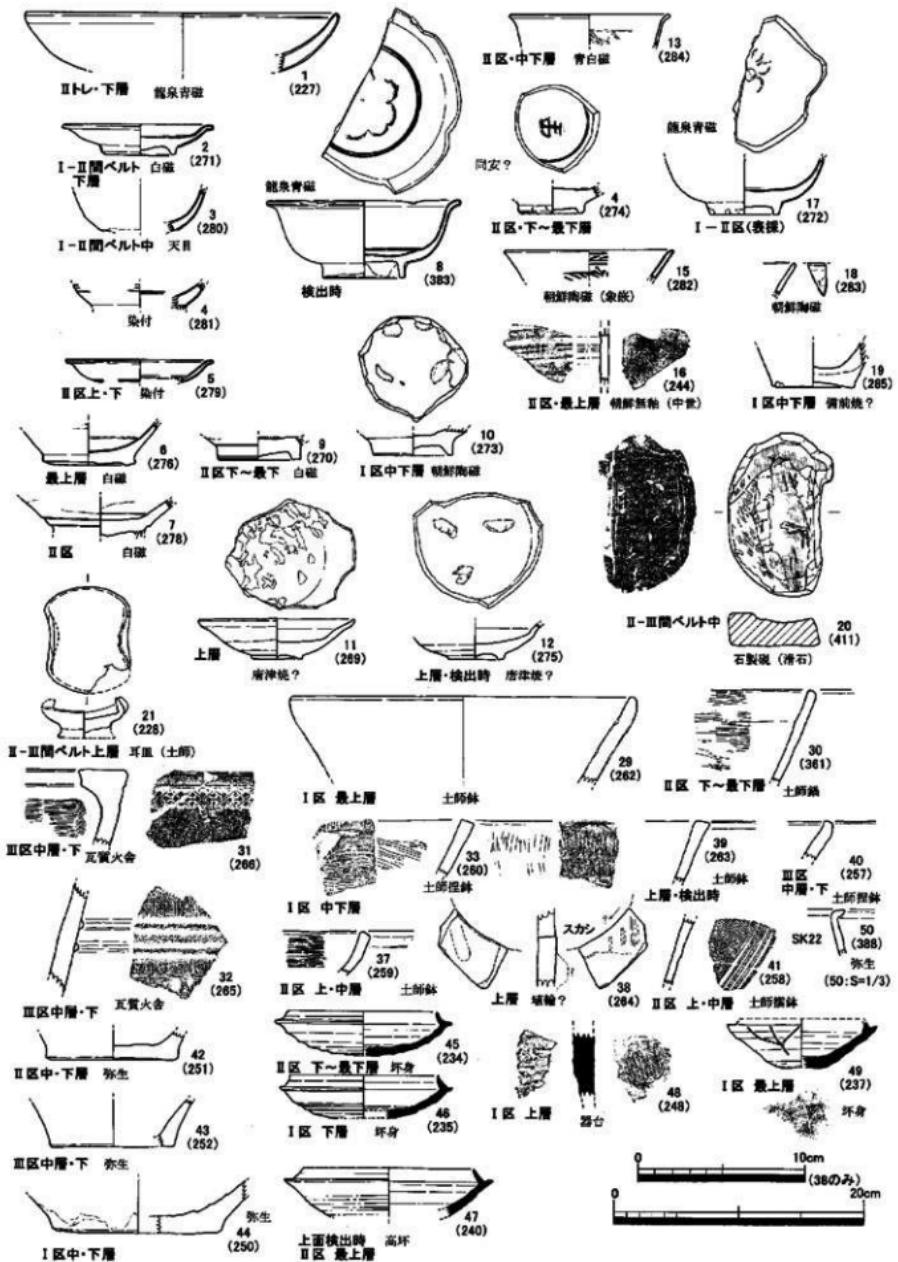


Fig. 27 SD01出土遺物(1) (S=1/4, 1/3)

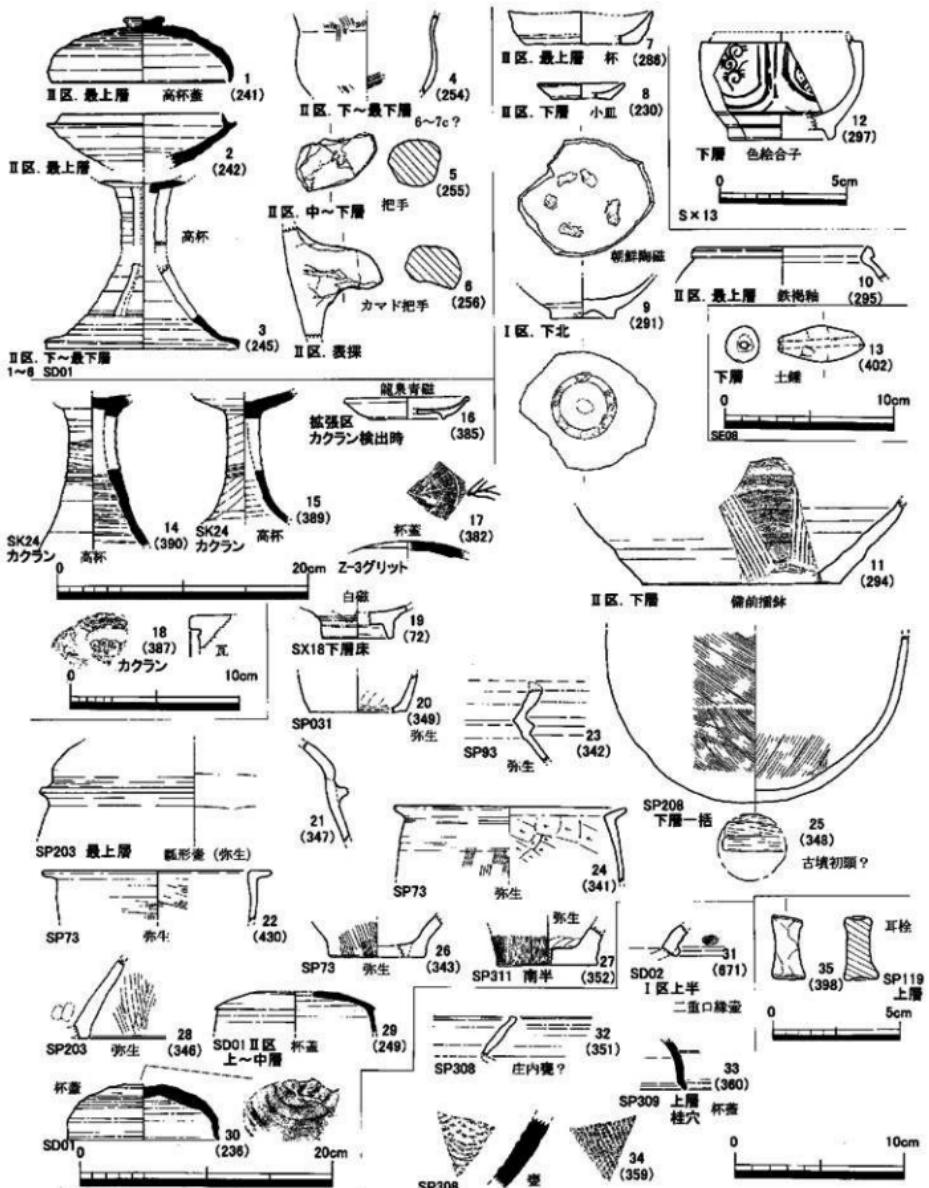


Fig. 28 SD01(2), SD02, 検出時、柱穴(SP)出土遺物 (S=1/4, 1/3, 1/2) -断面黒は須恵器

～30の須恵器は6～7世紀で、19は東海産の形態の高坏、20は大型器台の破片で注目される。大型建物SB07に関連するか。Fig. 26のSK16の土器群は弥生後期前半を3つに分けた場合の2段階目のセットだが、小片の共伴はやや疑問である。Fig. 27-45以下は6～7世紀の須恵器で、48は大型器台の脚柱状部の破片。同図38は劍塚北古墳のタテハケの一組の円筒埴輪に類似する。Fig. 28-1～3の高坏は一つのセット。Fig. 28-12の色絵合子は森本朝子氏の玉穂があるのでそれを参照されたい。Fig. 28-25は在来系の柶。同図35は耳栓状の土製品で、弥生時代のものか。Fig. 29-1の木柶はカシ材で、木取りは芯接。同図2は漆？の塗箸。削材。3、4の斎串状木製品は、スギ材で、板目取り。5の加工部材はスギ材の柵目取りである。Fig. 28-1は砥石、同図2は滑石製の有孔円板か。



Ph. 27 SE08出土木製品写真  
(番号はFig. 30に一致)

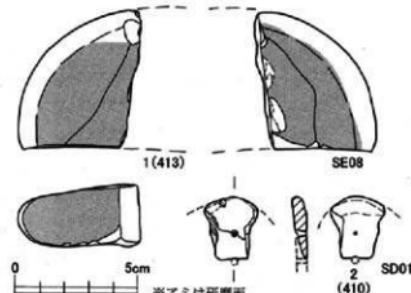


Fig. 29 SE08・SD01出土石製品 (S=1/2)

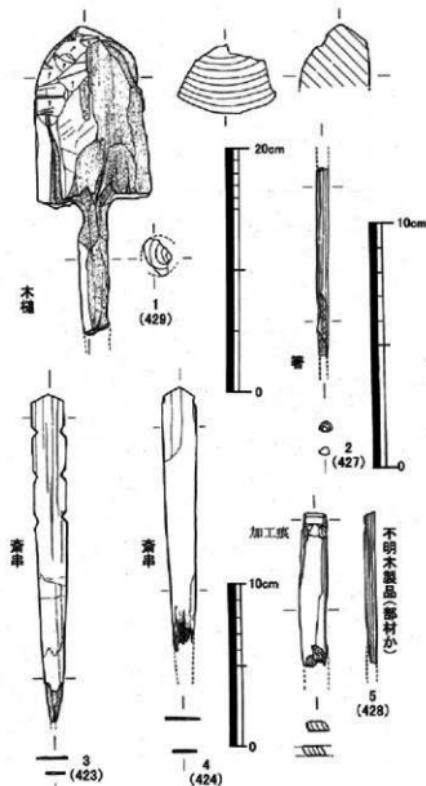
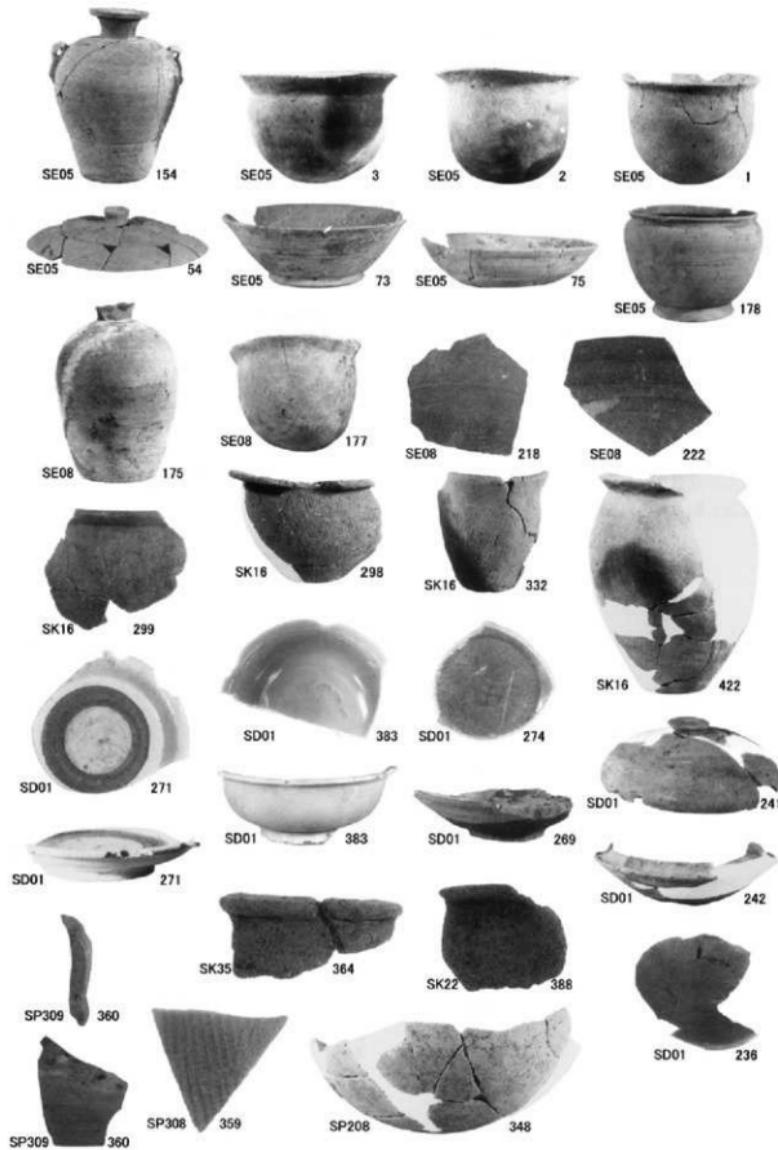


Fig. 30 SE08出土木製品 (S=1/4, 1/3, 1/2)



Ph. 28 各遺構出土遺物写真（番号はFig. 22～28の（ ）内に対応）

## IV. 自然科学分析報告

### 1. 福岡市那珂遺跡第68次調査出土の色絵合子 -成分の化学分析-

1) 分析資料について 森本朝子

2) 精と胎土の化学分析および産地の推定 二宮修治、網干 守、肥塚隆保、山崎一雄

#### 1) 分析資料について

森本朝子

本調査で16世紀代の遺構（SX13-SD02連続部下層）から色絵の破片が出土した。この陶片は合子の身の一部で高台から体部上方まであり、蓋受け部分も僅かながら残っている状態であった。上は黄味の白でやや粗く、小孔があり小さな黒点がぱらっと散っている。軟質の磁胎である。釉は薄く青みを帯び、失透性でやや厚みがある。氷裂は見られず光沢がある。内外面とともに施釉されるが、蓋受け部と高台下部から外底は露胎である。文様は線描きで、釉下にコバルトで窓を描くが薄くぼやっとしている。この青に重ねながら赤絵で3重に枠取りをしている。左の窓にはくすんだ赤で渦巻きを縦に重ねた草状の文様を描いているが、3つの渦巻きの中心には薄く黄がかった浦の跡がある。緑色の上絵が落ちた跡であろう。右の窓にはやはり赤で斜め格子に点を入れている。

全体として釉や胎土に疑問があるものの、文様や上絵共、ことに緑の特徴からベトナムの色絵である可能性があるようと思われた。世に「安南」と称されているものに堅手の一派があるとのことでその点に引っかかった。

折しもベトナム古陶磁調査団（注）がベトナムで採集した陶片の化学分析が最終段階に入っていて、幸うじてこの合子もその中に入れることができた。今回の分析には一定の期間を置いて数値を測定するという過程があり、数値が出たのが本報告書の締め切り直前というきわどい作業となった。時間的な制約から、数値の処理や分析はまだ十分とはいえない段階にあるが、ひとまずこれまでに分かつたことを報告したい。

（注）長谷部楽爾氏を团长に組織された研究グループ。ベトナム陶磁史研究のためにハノイの考古学院と共に現地調査を行った。1991年から1994年にわたって5次の調査を行い、古窯址の発掘、陶磁資料の分布調査を実施した。筆者（森本）も一員として参加した。

#### 2) 精と胎土の化学分析および産地の推定

二宮修治、網干 守、肥塚隆保、山崎一雄

##### （1）精の成分

陶片の精から試料をとることが許されなかつたので、螢光X線分析法により定性分析を行つた。文様の無い部分の精からは通常の珪酸塩の成分のほかに、鉛が検出された。これは色絵の融剤として使用されたものである。赤色の文様には鉄と鉛が存在する。すなわち赤色は酸化鉄（ベンガラ）により、鉛は融剤によるものである。精の影響を避けるため陶片の破面を用い、青色の染付の部分を分析したがコバルト、マンガンの存在が確認された。

##### （2）胎土のX線回析による鉱物成分

胎土中の鉱物成分をX線回析により調べたところ、主成分の石英のほかには、少量のムライトが生成しており、未分解の長石は存在せず、またクリストバライトも生成していない。したがって焼成温度は磁器としてはやや低い1000～1100度と推定される。

(3) 胎土の放射化分析と産地の推定

陶片の破面から胎土約30mgをとり、立教大学の原子炉を用い、機器中性子放射化分析により微量元素成分を定量した。結果を表1に示した。

表1 色絵合子胎土の微量元素成分 (ppm)

	色絵合子	枢府白磁 (6個平均)	明青花 (5個)	ベトナム黎朝 青花(7個)	ベトナム黎朝 白磁(6個)
ルビデウム (Rb)	29.0	577±120	390±124	110±15	120±25
セシウム (Cs)	1.0	70±31	57±15	12±2	12±3
ランタン (La)	10	14±2	17±4	56±6	55±9
セリウム (Ce)	27	24±1	23±3	79±19	100±12
サマリウム (Sm)	3.7	2.8±0.2	3.6±0.4	7.2±0.9	7.2±1.2
ユウロピウム (Eu)	1.3	0.38±0.01	0.58±0.07	1.4±0.1	1.3±0.2
ルテチウム (Lu)	0.15	0.24±0.06	0.25±0.06	0.58±0.06	0.57±0.1
トリウム (Th)	12	10±1	11±1	20±3	21±2
ハフニウム (Hf)	2.4	3.1±0.3	3.4±0.2	7.9±0.6	8.9±0.7
スカンヂウム (Ss)	3.2	4.6±0.4	4.1±0.6	13.4±1.7	14±2

\* ( ) 内はサンプルの個数。数値はその平均値である。

種々の事情により結果のクラスター分析を行う余裕が無かつたため、ベトナムで出土した中国枢府白磁、明青花、ベトナム青花、ベトナム白磁の微量元素成分の数値と直接比較した（表1参照）。その結果、この陶片の胎土の微量元素10元素のうちセシウムとユウロピウムの含有量はベトナムの陶片に近いが、残りの8元素は中国産に近く、ベトナムよりは中国産と見るほうが妥当と結論された。なおさらに詳しく検討する予定である。

X線の実験を援助された降幡順子氏に謝意を表する。



Ph. 29 色絵合子写真 (外面)



Ph. 30 色絵合子写真 (内面)

## 2. 那珂遺跡（68次調査）の自然科学分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

### 1) はじめに

那珂遺跡（68次調査）で検出された弥生時代後期の土坑について、トイレ遺構としての可能性があるかどうかを、花粉分析、寄生虫分析、種実同定を行うことによって確認する。また、奈良時代末の井戸の下層から検出された種実の種類を知り、当時の植物利用に関する検討を行う。

### 2) 試料

試料は、弥生時代後期の遺構であるSK16の覆土のうち、上層（試料番号1）、中層（試料番号2）、下層（試料番号3）の3点を用いる。種実同定の試料は、奈良時代末の井戸（SE08）から検出されたもの1ケースで、数十個入っている。

### 3) 分析方法

#### (1) 花粉分析

試料を約10gを秤量し、塩酸による石灰質の除去、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数する。

#### (2) 寄生虫分析

試料を一部採取し、水で薄めたあとグリセリンで封入して観察したが、寄生虫卵は検出されなかつた。このため、寄生虫卵の濃集が必要であることから、金原正明・金原正子（1992）を参考に以下のようないき方を実施した。試料を10ccを量りとり、重さを測定して分析用試料とした。これについて、フッ化水素酸による泥化、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去の順に物理・化学的処理を施し、濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数する。

#### (3) 種実同定

土壤試料に関しては、試料200gを秤量し、これに数%の水酸化ナトリウム水溶液を加えて1昼夜放置し、試料の泥化を行う。0.5mmの筋を通して水洗し、残渣を集め。SE08出土の単体種実とあわせて双眼実体顕微鏡で観察し、その形態的特徴から種実を分類・同定する。

### 4) 結果

#### (1) 花粉分析

分析の結果、3試料とも花粉化石が全く検出されなかった。分析残渣は少なく、炭化した材片などの植物遺体が多少みられる程度である。

#### (2) 寄生虫分析

分析の結果、寄生虫卵は全くみられなかった。分析残渣の状態は、花粉分析残渣に類似する。

#### (3) 種実同定

SK16の土壤試料に関しては、水洗選別後の残渣には種実遺体はみられず、ほとんど砂粒である。SE08の種実遺体は、アサが1個体、メロン類が1個体、イヌコウジ属が1個体、タデ属が7個体含まれている。その他は種子ではない同定不能のものや、昆虫類であった。以下に検出された種類の形態的特徴を示す。

##### ・アサ (*Cannabis sativa L.*) クワ科アサ属

種子が検出された。灰褐色で橢円形、大きさは3mm程度。縦に全周する稜があり、下端におおきな「へそ」がある。表面は薄くて堅く、ややざらつく。

##### ・タデ属 (*Polygonum sp.*) タデ科

果実が検出された。大きさは2mm程度。側面縁は紡錘形で上面観は凸レンズ状。表面は薄くて堅く、ざらつく。

##### ・イヌコウジ属 (*Mosla sp.*) シソ科

果実が検出された。黒褐色。大きさは1mm程度。いびつな球形で、先端に「へそ」が見られる。表面全体には、荒い亀甲状の網目模様がある。

##### ・メロン類 (*Cucumis melo L.*) ウリ科キュウリ属

種子が検出された。大きさは6mm程度で一部破損する。側面観は梢円形、上面観はやや偏平な梢円形。表面は比較的平滑。

#### 5) 考察

トイレ遺構の堆積物と分析手法に関しては、金原正明・金原正子（1994）に詳しく述べられている。これによれば、トイレ遺構の堆積物に含まれるものとして、魚などの動物骨、種ごと食するような種実、食糞性の昆虫、栽培植物の花粉、寄生虫卵等があげられている。しかし今回の分析ではいずれも検出されていない。これらの遺物は、低湿地などの嫌気的な条件下では残存している可能性が高いが、好気的状況下では分解されやすい。そのため、花粉や種実が堆積物中に保存されなかつたと考えられる。このように、今回の分析方法ではトイレ遺構の可能性について確認できなかつたが、今後土壤中に残存したリン酸や重金属（亜鉛、鉛など）などを調査し、その濃度を比較することによって、トイレ遺構が確認できる可能性もある。

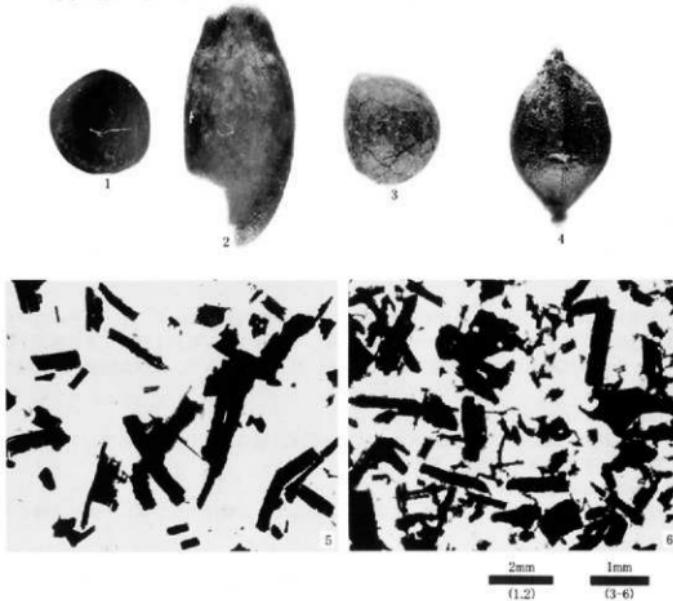
一方、井戸の下層から検出された種実遺体は4種類である。このうち、メロン類とアサは渡来種であることから、付近で栽培・利用されていたものに由来するのであろう。一方、タデ属やイヌコウジュ属は遺跡周辺に生育していた人里植物（いわゆる雜草）に由来すると思われる。このように、井戸からは栽培植物などの有用植物が検出される場合が多く、各地の遺跡で当時の植物利用に関する重要な情報がえられている。

#### <引用文献>

金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫、「藤原京跡の便所遺構－右京七条一坊西北坪一」、p. 12-15、奈良国立文化財研究所。

金原正明・金原正子（1994）堆積物中の情報の可視化、可視化情報、14, p. 9-14.

Ph. 31 種実遺体・寄生虫卵分析状況



1. アサ (SE08下層一括)

3. イヌコウジュ属 (SE08下層一括)

5. 寄生虫卵分析の状況写真 (試料番号1)

2. メロン類 (SE08下層一括)

4. タデ属 (SE08下層一括)

6. 寄生虫卵分析の状況写真 (試料番号2)

## V. おわりに

### 1. 調査成果と課題

那珂68次調査では、近代以降の削平や搅乱によって遺構の遺存状況があまり良好ではなかったにもかかわらず、各時代の遺構・遺物が検出され、古墳時代後期末の大型建物SB07や、古代の2基の井戸とその一括土器群など、貴重な発見があった。遺構との共伴関係を度外視すれば、搅乱出土の遺物を含めて考えると、弥生中期後半～後期前半、古墳初頭前後、5世紀末（Fig. 27-38, Fig. 28-29）、6世紀第3四半期（III A期新相）～7世紀中頃（IV期新相）、8世紀後半～9世紀前半、12世紀前後（白磁・同安窯系青磁）、15～17世紀前半（SD01・02）の遺物があり、本来はこれら各時期の遺構が濃密に分布していたと考えても誤りではあるまい。9世紀初頭頃のSE05はきわめて多量の遺物を出土し、8世紀末のSE08は斎串を出土し注目されるが、那珂遺跡群には8～9世紀の井戸が多く分布し、特殊な有力集落と判断され、「那珂郡衙」の有力候補地と考えられる。また、SD01・02に類似する中世末の大溝は、那珂遺跡群内でいくつか検出されており、台地を縦横に走るとみられる。有力者の屋敷地（群）ないしは一種の「城」が存在したと考えられる。また、この時期を境とした遺構の残存状況の相違から、中世末に那珂台地は大きく造成や開墾などがなされたと推定される。中世後期の状況についても、従来の調査成果を総括する時期にあろう。

### 2. 大型建物SB07が提起する中枢施設群の推定所在地

今回検出した大型建物SB07は、報告の中で考察したような5×5間の大型建物になるとすれば、「宮殿」建築に準じ、きわめて重大な発見となる。この建物の時期は、III A期新相（6世紀後葉）を上限とし、建て替えを考慮して2世代近く存続したとすれば、IV期古相（7世紀初頭）頃までの期間が考えられる（III A～V期の編年観は福岡市埋蔵文化財調査報告書第615集25～26頁参照）。出土遺構を度外視すれば、調査区内出土遺物の中には、この時期幅内の須恵器が多く含まれ（Fig. 25-18～20, 28～30, Fig. 26-22, 27, Fig. 27-45～49, Fig. 28-1～3, 14, 15, 17, 30）、高坏（？）が目立つことや、大型器台2点や東海系高坏（？）があることなど、通常の集落とは異なる様相を呈している（器台2点も陶邑など他地方産か）。比恵・那珂遺跡群では、III B～IV・V期の大型建物群や多重構列がいくつか検出されているが、今回の建物の時期に近いものでは比恵8次（第116集）の倉庫群と櫛列がある（III A期の集落を切り、柱穴にIV期の須恵器を廃棄）。これは比恵遺跡群北西台地上にあり、那珂川の水運に関連する物資集積の倉庫群であろうが、当時の中心施設ではない。Fig. 31にはIII B～IV期中相における比恵遺跡群南半から那珂遺跡群の遺構分布をまとめた。68次の南150mには、



Ph. 32 大型建物SB07写真（後方はSA01、南から）

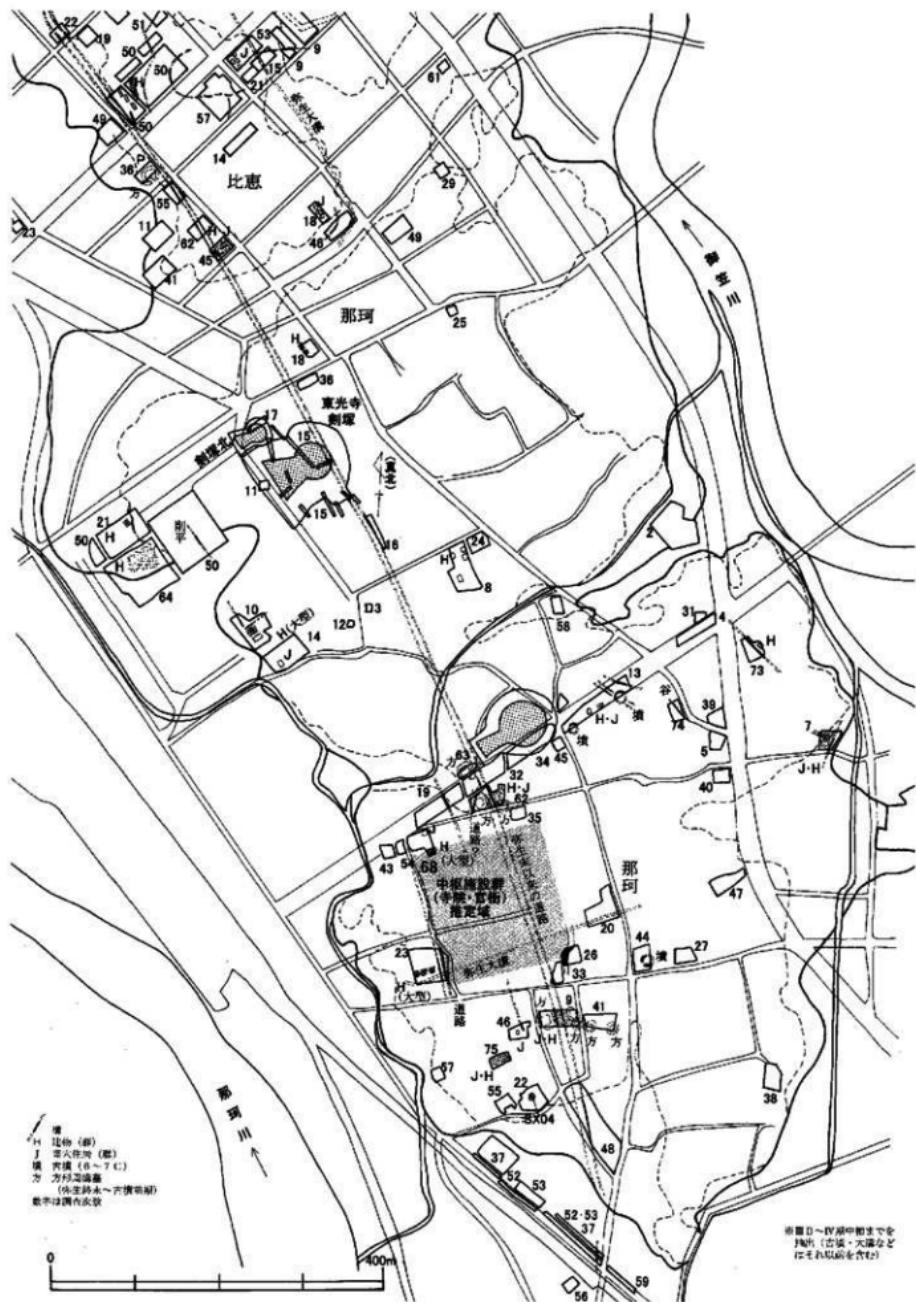


Fig. 31 6世紀後半(末)～7世紀前半頃の那珂・比恵(南半)遺跡群 (S=1/6000)

比恵8次と類似する23次の倉庫群(IV期古相前後)があり、この東の二条の溝は延長すると奇しくも68次の西側の里道と重なり、SB07とほぼ同方位である。この二条溝は、東120mに存在すると考えられる弥生終末以来の道路とほぼ平行し、さらに19次の溝とも平行する。これらは23次~20次の弥生中期後半成立の大溝と直交する。この大溝は、当時は埋設していたとしても地形の変換線としては残っていたと思われ、また弥生終末以来の道路の存在はこの時期までの遺構の展開や方位にも影響している状況が看守され、これらの溝からなる略方格の地割りが想定できる。これに関連して、26次の6世紀木垣成立の大溝は奇妙な屈曲があり、上記の地割りと関係する可能性がある。これを南東隅とし、西辺を23次の二条溝、北西端を68次SB07としたのが図のアミの範囲であり、この部分は地形が若干高いことも留意される。このアミの範囲を囲むように、13, 35, 23, 22次でIV期の須恵器を伴う「神ノ前タイプ」瓦が山上しており、寺院を含むような官衙までの特殊な中枢施設(群)をこの範囲に想定する蓋然性が存在する。68次SB07はその一角を検出したものであろう。それが「並び倉」とした場合も、23次の同様の倉庫群などとともに中枢施設群を囲んでいたという解釈が可能である。文献史学上の検討を含めた詳細な論考は今後に委ねるが、その想定される「中枢」施設群が、『日本書紀』の「那津官家」や「筑紫大宰」の拠点の所在地とする推定も、単なる憶測ではない状況にあることが理解されよう。

遺跡名	那珂遺跡群第68次調査		
遺跡調査番号	9861	遺跡略号	NAK-68
調査地地籍	福岡市博多区竹下5丁目94	分布地図番号	23-0085
開発面積	1,007m <sup>2</sup>	調査面積	599m <sup>2</sup>
調査期間	1999(平成11)年2月12日~3月31日	事前審査番号	10-2-441

